

平成18年度

慶應義塾大学体育研究所

活動報告書

特集：「YOKOHAMA FCと慶應義塾大学体育研究所が提携」
— 新たなスポーツ文化の発信にむけて —



目 次

巻 頭 言（植田所長）	1
I. 特集：「YOKOHAMA FC と慶應義塾大学体育研究所が提携」 —新たなスポーツ文化の発信にむけて—	3
II. 研究活動記録（研究委員会）	
1. 個人研究業績・研究教育活動・研究助成	9
2. 所内定例研究会発表要旨	18
3. 浅野基金研究補助による研究成果報告	30
4. 大学体育連合中央研修会参加報告	31
III. 教育活動記録（教育委員会）	
III－1. 授業の実施	
1. 体育科目の履修者統計	37
2. 授業評価の実施	41
3. 未履修者アンケートの実施	48
4. 通信教育対象科目	50
5. 他学部及び塾内における授業協力	51
III－2. スポーツイベントの開催（スポーツ振興委員会）	
1. 塾長杯・塾内競技会	52
2. 体育科目ガイダンス期間中のイベント	56
3. 公開講座（他）	56
4. 所内施設の開放	58
IV. 業務活動記録（栗谷主事）	61

巻 頭 言

大学体育研究所

所 長 植 田 史 生

本研究所は、大学院・社会連携複合施設建設の為、藤山記念館二階に移転いたしました。トレーニングルームは体育館前に、エアロビクススタジオは記念館1階北側控室に代替施設を設け、プールは民間プールを借用し授業を継続いたしました。5月下旬には陸上競技場とプールの間にあったレンガ色の大学体育研究所が取り壊され、スポーツ拠点のシンボルが無くなったときには、一抹の寂しさがありました。しかし、2008年4月には、体育館卓球場部分に新体育研究所が立て替えられることになりました。この間も充実した研究・教育活動を行わなければなりません。

研究面においては、「一貫教育校との連携」、「塾生の形態・運動機能の評価」、「産学協同スポーツプロジェクトマネジメント」、「技術向上のための研究」、「体育・スポーツに関する人文・社会学的な研究」という5大テーマでプロジェクト研究が動き出しました。「産学協同スポーツプロジェクトマネジメント」では、8月7日に横浜に本拠地を置くプロサッカーチーム横浜FCと提携を行いました。このことは、新たなスポーツ文化の発信にむけて、スポーツを通して大学と地域スポーツクラブ、企業、そして地域住民相互の有益な関わり方を研究する一環として行いました。すでに横浜FCと慶応義塾の拠点地域を生かしたスポーツ活動の実践として、サッカースクールが開催されています。他のプロジェクトも追々結果が報告されることになります。

本研究所と大学教養研究センター、大学学生総合センターとの協力体制も緊密になり一定の成果が見られています。また、体育会はじめ他機関との更なる協力体制が必要であると考えています。

本研究所は、「知育・徳育・体育」の一翼を担う機関として、体育・スポーツ分野特有の身体運動・身体知識の教育プログラムを展開し、心身に「感動」と「興奮」を与えるとともに、塾風を涵養することを目標としています。慶應義塾創立150年に向けて、多くの人の交流と社会連携が生まれる日吉キャンパスが構築されるこのときに、感動体験を基礎とした健康・体育教育とスポーツ活動の促進に寄与し、未来を見据えた活動でなければならないと実感しています。

I. 特集：

YOKOHAMA FC と慶應義塾大学体育研究所が提携 — 新たなスポーツ文化の発信にむけて —

概 要

平成18年4月、体育研究所では来る慶應義塾創立150年を迎えるにあたり、いくつかの研究プロジェクトを立ち上げた。その一つである＜産学協同スポーツプロジェクトマネジメント＞と銘打った研究プロジェクトの活動推進のため、同年8月、プロサッカーチームYOKOHAMA FC と提携を結んだ。その内容について報告する。

1. はじめに

体育研究所では来年2008年に迎える慶應義塾創立150年を記念して、幾つかの研究プロジェクトを立ち上げた。その一つが＜産学協同スポーツプロジェクトマネジメント＞研究である。この研究プロジェクトは、慶應義塾21世紀グランドデザインの基本方針「21世紀の基盤たるべき人を育み、学問と価値を創り、世界に貢献することを通して国際的に尊敬される学塾となるために、感動の湧き出る教育を実践し、新しい知的価値の創造と蓄積に精励し、新たな実業の世界を切り拓くこと」を踏まえ進められている。

2. ＜産学協同スポーツプロジェクトマネジメント＞研究とは

近年、大学と地域とのつながりに関する話題は多く、大学と企業についても同様である。また、地域に密着したスポーツクラブチームの成長も著しい。

そこで本研究プロジェクトでは、スポーツを通じた大学と地域スポーツクラブ、企業、そして地域住民相互の有益な関わり方に焦点を当て調査、検討を行い、(1) 慶應義塾および地域社会における健康増進、人格形成、社会教育の実践 (2) 地域に浸透したスポーツの振興およびスポーツ愛好者の獲得 (3) 地域における経済性の発見と活性化を目的とするものである。

3. 提携に至る経緯

これまで体育研究所では、大学の内外を対象としてスポーツ振興分野の活動を活発に実践し、数多くのスポーツイベントを主催してきた。その中で KEIO Ball-Games Festa 及び塾長杯フットサル大会(2003年～)の開催において、以前横浜市港北区日吉に事務所のあった YOKOHAMA FC とイベントにおけるゲストの派遣や会場等に関して協力をしてきた。その後イベント企画運営に関するミ-

ティングを重ねる毎に、同地域でスポーツの発展に携わる組織同士、これまで以上に協力を密接にして地域に対して出来ることはないだろうかとの議論が活発となった。

大学と地域スポーツクラブとの提携例を見ると、大学サッカー部のサテライトチーム化や大学施設への出資によるグランドの定期利用、プロチームへの出資による宣伝等が上げられる。

我々は市民クラブとして立ち上がった YOKOHAMA FC の地域に愛され支えられるチームづくりの信念と体育研究所の体育・スポーツに関する研究とがより一層協力を強くすることにより、地域に浸透したスポーツの振興や地域における経済性の発見と活性化などに寄与できると考えた。

そこで今回のように、同じ地域に本拠地を置く大学組織とプロサッカーチームが提携する運びとなった。

4. 記者会見の開催

日 時：2006年8月7日(月)15:00～16:10

会 場：慶應義塾大学日吉キャンパス

来往舎1F シンポジウムスペース

出席者：

奥寺 康彦 (YOKOHAMA FC 代表取締役)

太田 博喜 (YOKOHAMA FC 営業部長)

植田 史生 (慶應義塾大学体育研究所教授・体育研究所長)

石手 靖 (慶應義塾大学体育研究所助教授・本研究プロジェクトリーダー)

司 会：小川 健 (慶應義塾広報室)

参加者：約30名 (マスメディア関係者、塾生、教職員等)

内 容：

(1) 提携内容に関する説明(石手靖助教授)

- ① 地域社会における健康増進、スポーツ振興を目的としたイベントの共同開催について
- ・ 各種スポーツ大会およびスポーツ教室の実施

- ・各種セミナー（栄養、トレーニング処方等）の実施
 - ・地域に根ざしたファンの獲得活動
- ②塾生に対するスポーツ社会教育の充実について
- ・インターンシップの実施(YOKOHAMA FC ホームゲームの運営に関わる業務や地域でのイベント活動の運営、それぞれの観客動員に関する調査、分析業務等)
 - ・講義科目の共同開発（学生にとって有意義なテーマを設定し、会社組織運営からチーム運営、選手の育成等スポーツに関わる幅広い展開）
- ③競技力向上を目的とした人材交流について
- ・指導者派遣および指導者養成
- ④地域における経済性の発見と活性化について
- (2) 体育研究所代表挨拶(植田史生所長)
- (3) YOKOHAMA FC 代表挨拶(奥寺康彦社長)
- (4) 質疑応答

5. 現在の活動状況

さまざまな地域において住民のスポーツへの意識に関する調査が実施されており、その報告の中には、「スポーツ活動はしたいがあまり身近でない（施設や価格の問題も含む）」という意見が目立つ。スポーツに関する情報の不足や情報発信方法にも問題点があるようである。また地域連帯感の希薄化も指摘されている。

そこで、来年度サッカースクール開催の準備を入った。大学にとっては新たな教育の場と研究の推進、YOKOHAMA FC にとっては地域貢献と収益確保である。地域住民（子供達）にとっては身近な良質の環境でサッカーが学べる。このような共同事業が大学と地域スポーツクラブを中心とした新しいビジネスモデルの確立と考える。

先ず、2006年11月13日(月) 15:30～18:30、

会場は慶應義塾大学日吉キャンパス下田サッカーグラウンドにて、短期サッカークリニック無料体験会を実施した。協賛には(株)エスエスケイ、ヒュンメル。対象は港北区在住、近隣在住の幼稚園年中、年長及び小学生（経験不問、男女、体験会参加において健康上問題のない方）で、指導はYOKOHAMA FC 普及部コーチ及び塾生が担当した。学年別に4クラスに分かれそれぞれ60名で合計240名の参加を得た。

続いて2006年12月4日(月)、11日(月)、18日(月) 15:30～18:30、計3回、短期サッカークリニックを開催した。こちらも合計190名の参加を得た。

6. 今後の展望

今後はこのような地域貢献活動や社会教育等の共同事業に対して共感を頂ける企業の存在が大きくなると考えている。また実施する調査研究の成果を下に一つひとつの活動を一步步ずつ深めることで、スポーツを通じ大学と地域スポーツクラブ、企業、そして地域住民の新たな共同事業を開発し、慶應義塾大学日吉キャンパスが地域社会の健康と教育の拠点となることを願っている。



Ⅱ．研究活動記録

1. 個人研究業績・教育業績・研究助成

植田 史生【教授】

著書・論文・報告書

(論文)

- ・植田史生, 村山光義, “剣道における動作分析の事例から－ LLLT とスポーツの動作分析”, 日本レーザー治療学会誌, 2: 69-71, 2006.
- ・村山光義, 植田史生, “筋硬度評価の観点から－ LLLT と筋硬度評価”, 日本レーザー治療学会誌, 2: 65-70, 2006.

学会発表等

- ・植田史生, 村山光義, “剣道における動作分析とその応用”, 第18回日本レーザー治療学会, 長野, 2006年7月.
- ・村山光義, 植田史生, “筋硬度評価の意義とその実際”, 第18回日本レーザー治療学会, 長野, 2006年7月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・財団法人 全日本学校剣道連盟理事, 通年.
- ・第48回全国教職員剣道大会審判副主任, 2006年8月.
- ・南ドイツ剣道夏季講習会講師, 2006年9月.
- ・日本レーザースポーツ医学会学術集会理事, 2006年11月－2007年3月.

近藤 明彦【教授】

著書・論文・報告書

(著書)

- ・佐藤望, 湯川武, 横山千晶, 近藤明彦, “アカデミック・スキルズ 大学生のための知的技法入門”, 慶應義塾大学出版会, 2006.

(論文)

- ・近藤明彦, “日本競技運動心志訓練的発展 (Development of Mental Training in Competitive Sport in Japan)”, 「卓越奧運表現心理学論壇」国際検討会 大会手冊 (2006 International Society of Sport Psychology Managing Council Meeting and international Forum of the Psychology of Olympic Excellence Proceedings), pp142-156, 2006.

(執筆)

- ・近藤明彦, “国際スポーツ心理学会”, “北米スポーツ心理学会”, “ヨーロッパスポーツ心理学会”, 最新スポーツ科学事典 (日本体育学会 監修), pp861-862, 平凡社, 2006.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・日本スポーツ心理学会理事, 通年.
- ・International Society of Sport Psychology, Managing Council Member, 通年.
- ・International Journal of Sport and Health Science, Section Editor (Psychology), 通年.

安藤 勝英【教授】

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・米国カリフォルニア州立サンノセ大学柔道指導, 2006年2月－3月.
- ・塾体育会柔道部師範, 通年.
- ・東京学生柔道連盟理事, 通年.

佐々木玲子【教授】

著書・論文・報告書

(論文)

- ・佐々木玲子, “子どもの動作発達”, チャイルドサイエンス, 3: 20-22, 2006.
- ・村松憲, 牛山潤一, 清水静代, 村山光義, 佐々木玲子, “超音波法を用いた塾生の形態評価について”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 46(1): 17-24, 2007.
- ・村山光義, 村松憲, 佐々木玲子, 清水静代, 野口和行, “動作映像の即時フィードバックを用いた技術指導の効果—フライングディスク・サイドアームスロー導入時の事例—”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 46(1): 1-15, 2007.

(執筆)

- ・佐々木玲子, 村松憲, 村山光義, 吉田泰将, “新・体育理論”, 慶應義塾大学出版会, 2006.
- ・中村和彦, 佐々木玲子, 松尾哲矢, 植田尚史, “「元気アップ親子セミナー」ブック TOUCH!”, 文部科学省, 2006.

学会発表等

- ・佐々木玲子, “子どもの動作発達” (キーノートレクチャー), 第57回日本体育学会, 青森, 2006年8月.
- ・村山光義, 村松憲, 佐々木玲子, 清水静代, 野口和行, “動作映像の即時フィードバックを用いた技術指導の効果—フライングディスク・サイドアームスローの事例—”, 第57回日本体育学会, 青森, 2006年8月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・文部科学省子どもの体力向上推進事業「元気アップ親子セミナー」における指導者対象研修会講師, 2006年6月—8月.
- ・日本ダンススポーツ連盟全国指導員講師養成講座講師 (“ダンススポーツとバイオメカニクス”), 2006年7月.
- ・JAF 認定キッズ・ジュニアエアロビック指導員養成講習会講師 (“子どもの発育発達と安全管理”), 2006年9月.
- ・健康運動指導士養成講習会講師 (“加齢と性差”), 2006年11月—2007年2月.
- ・スポーツプログラマー養成講習会共通科目集合講習会講師 (“ジュニア期のスポーツ”), 2006年11月.

研究助成等

- ・“塾生の身体機能および形態の特徴とその機能に関する研究”, 慶應義塾学事振興資金 (共同, 研究代表者: 佐々木玲子), 80万円.

当年中の研究教育活動の概要

(ビデオ製作協力)

- ・「元気アップ親子セミナー」保護者向けセミナー教材“元気アップ! 親子でアソボ!”, 文部科学省, 2007年1月.
- ・“テキストの周辺「新・体育理論」”, 三色旗, 706号: pp32-33, 慶應義塾大学通信教育部, 2007年1月.

綿田 博人【教授】

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・塾体育会副理事, 通年.

松田 雅之【助教授】

学会発表等

- ・丸田巖, 松田雅之, 山内賢, “高校男子スポーツ選手のサプリメント摂取状況”, 第57回日本体育学会, 青森, 2006年8月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・関東学生陸上競技連盟評議員，通年.

石手 靖【助教授】

著書・論文・報告書

(執筆)

- ・石手靖，須田芳正，“慶應義塾大学体育研究所，横浜 FC と提携 ―新たなスポーツ文化の発信に向けて―”，体育科教育，54(12): 70，2006.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・塾体育会副理事，通年.
- ・バレーボール学会理事・渉外委員長，2006年4月

村山 光義【助教授】

著書・論文・報告書

(論文)

- ・内山孝憲，大杉健司，村山光義，“押し込み反力計測による筋の硬さの評価―等尺性収縮力依存性と筋疲労の影響―”，バイオメカニズム，18: 219-228，2006.
- ・村山光義，植田史生，“LLLT とスポーツ科学の接点を探る その1：筋硬度評価の観点から LLLT と筋硬度評価”，レーザー治療学会誌，5(2): 65-68，2006.
- ・植田史生，村山光義，“LLT とスポーツ科学の接点を探る その2：剣道における動作分析の事例から LLLT とスポーツの動作分析”，レーザー治療学会誌，5(2): 69-71，2006.
- ・村山光義，村松憲，佐々木玲子，清水静代，野口和行，“動作映像の即時フィードバックを用いた技術指導の効果―フライングディスク・サイドアームスロー導入時の事例―”，慶應義塾大学体育研究所紀要，46(1): 1-15，2007.
- ・村松憲，牛山潤一，清水静代，村山光義，佐々木玲子，“超音波法を用いた塾生の形態評価について”，慶應義塾大学体育研究所紀要，46(1): 17-24，2007.

(執筆)

- ・佐々木玲子，村松憲，村山光義，吉田泰将，“新・体育理論”，慶應義塾大学出版会，2006.

学会発表等

- ・村山光義，“筋硬度評価の意義とその実際”，第18回日本レーザー治療学会，長野．2006年7月．
- ・村山光義，村松憲，佐々木玲子，清水静代，野口和行，“動作映像の即時フィードバックを用いた技術指導の効果―フライングディスク・サイドアームスローの事例―”，第57回日本体育学会，青森，2006年8月．
- ・加藤亮子，村山光義，内山孝憲，“摘出筋における張力と筋硬度の関係”，第27回バイオメカニズム学術講演会，兵庫，2006年10月．
- ・村山光義，内山孝憲，米田継武，“蛙腓腹筋における筋の長さ―張力関係と筋硬度の比較”，第139回日本体力医学会関東地方会，東京，2007年3月．

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・東京電機大学テニス実習講師，2006年9月．
- ・順天堂大学スキー実習講師，2007年2月．
- ・北里大学スキー実習講師，2007年2月．
- ・バレーボール学会渉外委員，2006年6月～2007年3月．

研究助成等

- ・“スイングスピード計測システムの開発と運動指導への適用プログラムの作成”，慶應義塾学事振興資金(共同，研究代表者：村山光義)，80万円．

- ・“塾生の身体機能および形態の特徴とその評価に関する研究”，慶應義塾学事振興資金（共同，研究代表者：佐々木玲子），80万円。
- ・“映像による即時フィードバックを用いた運動学習システムの開発と応用”，慶應義塾学事振興資金（共同，研究代表者：村松憲），80万円。

当年中の研究教育活動の概要

平成18年度中は，教養研究センター基盤研究プロジェクト「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」の幹事として主に「成績評価方法」に関する調査研究を進め，報告書の作成に携わった（平成19年度報告予定）。研究所内共同研究では，技術向上に関する検討グループのプロジェクトリーダーとして，新たにスイングスピード計測システムの開発を進めるとともに，前年度より継続中の映像の即時フィードバックシステム，塾生の形態計測に関するプロジェクト研究に参画した。また，理工学部物理情報工学科内山研究室との継続的な共同研究テーマとなっている筋硬度変化の生理学的意義に関する検討でも，論文・学会発表を行った。

山内 賢【助教授】

著書・論文・報告書

（執筆）

- ・松井幸嗣（監修），山内賢（執筆），“日本体育大学運動方法（ハンドボール）研究室授業用ノート”，叢文社，2006年4月。
- ・井川正治，川口毅，川田智恵子，影山なお子，木場本弘治，村上哲朗，山内賢（執筆），後藤洋一，村上哲朗（監修），“健康増進運動始動師養成テキスト（初版）”，pp43-56，NPC 日本印刷，2007年3月。

学会発表等

- ・丸田巖，山内賢，松田雅之，“高校男子スポーツ選手のサプリメント摂取状況”，第57回日本体育学会，青森，2006年8月。
- ・阿久根英昭，山内賢，金野潤，小嶋新太，秋葉茂季，“静立時の足底圧力分布が脚長差や障害および歩行に及ぼす影響”，第61回日本体力医学会，兵庫，2006年9月。
- ・山内賢，阿久根英昭，“高齢者の転倒と足底圧力分布および膝関節障害との関係”，第65回日本公衆衛生学会，富山，2006年10月。
- ・茶園美香，新藤悦子，山下香枝子，小林正弘，中野裕子，廣岡佳代，山内賢，“家庭で生活している高齢者の日常生活動作および身体機能の実態”，第11回日本看護研究学会東海地方会学術集会，静岡，2007年3月。

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・大学体育連合大学体育評価審査委員会委員，通年。
- ・湘南大庭地区社会福祉協議会主催イベント運動指導・講演（“健康をデザインする～体育・食育・知育～”），2006年11月～2007年3月。
- ・第57回日本体育学会 一般発表「体育方法（1）」座長，青森，2006年8月。
- ・第139回日本体力医学会関東地方会 一般演題発表 座長，東京，2007年3月。

研究助成等

“生活活動力テストの開発”，慶應義塾学事振興資金（個人研究B），20万円。

吉田 泰将【助教授】

著書・論文・報告書

（執筆）

- ・佐々木玲子，村松憲，村山光義，吉田泰将，“新・体育理論”，慶應義塾大学出版会，2006。

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・財団法人全日本学校剣道連盟常務理事，通年
- ・全日本学生剣道連盟総務委員会委員，通年

- ・全日本学生剣道連盟・関東学生剣道連盟，審判員，通年
- ・関東学生剣道連盟将来構想委員会委員，通年
- ・全日本学連剣友会事務局，通年
- ・関東学連剣友連合会事務局，通年
- ・慶應義塾体育会剣道部（三田剣友会）助教，通年
- ・慶應義塾大学医学部体育会剣道部師範代行，通年
- ・第3回全日本学連剣友剣道大会 大会実行委員（本部・総務）

研究助成等

- ・“スイングスピード計測システムの開発と運動指導への適用プログラムの作成”，慶應義塾学事振興資金（共同，研究代表者：村山光義），80万円。

当年中の研究教育活動の概要

ラケットスポーツや野球・剣道などでは，スイングスピードや用具のコントロールが重要な技術となる．平成18年度は，剣道の竹刀を対象に，加速度センサを用いたスイングスピードの簡易計測システムを開発し，日常のトレーニング場面への適用するための基礎的検討を行った．竹刀先端内部に小型加速度センサを固定し，竹刀操作速度を計測するシステムを開発し，熟練者－非熟練者間で比較した．実際の指導の現場では，こうした測定より得られた目標値を基準に，トレーニング効果を判定することが可能となるであろう．

加藤 大仁【助教授】

学会発表等

- ・加藤大仁，「スポーツ政策研究の領域と課題－スポーツ政策過程研究の立場から」，日本体育・スポーツ政策学会第16回大会シンポジウム，2006年12月。

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・Pete Newell's Tall Women's Basketball Camp コーチングスタッフ，カリフォルニア州サンディエゴ，2006年7月。

野口 和行【専任講師】

著書・論文・報告書

（論文）

- ・村山光義，村松憲，佐々木玲子，清水静代，野口和行，“動作映像の即時フィードバックを用いた技術指導の効果－フライングディスク・サイドアームスロー導入時の事例－”，慶應義塾大学体育研究所紀要，46(1): 1-15, 2007.
- ・樋口利彦，吉富友恭，野口和行，“野外教育と環境教育”，野外教育研究，10(1): 17-28, 2007.

（執筆）

- ・野口和行，“ロープワーク入門”，キャンピング，113: 10-11, 2007.

学会発表等

- ・樋口利彦，吉富友恭，野口和行，“野外教育と環境教育”，日本野外教育学会第9回大会分科会，東京，2006年9月。

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・（社）日本キャンプ協会専門委員，通年。
- ・（財）日本教育科学研究所研究員，通年。
- ・（社）日本キャンプ協会キャンプディレクター2級講習会講師，2006年9月。
- ・（財）日本教育科学研究所アウトドアゲーム指導法講習会講師，2006年10月。
- ・（社）日本キャンプ協会キャンプディレクター1級講習会講師，2006年11月。
- ・（社）日本キャンプ協会キャンプディレクター2級講習会講師，2007年2月。

須田 芳正【専任講師】

著書・論文・報告書

(執筆)

- ・須田芳正, “サッカーと私”, 仔馬. 58(3):6-7, 2006.
- ・石手靖, 須田芳正, “慶應義塾大学体育研究所, 横浜 FC と提携 ―新たなスポーツ文化の発信に向けて―”, 体育科教育, 54(12): 70, 2006.

学会発表等

- ・岡本孝孝, 大嶽真人, 依田珠江, 須田芳正, 安松幹展, 李宇諤 “世界のフットサル戦術から見いだす日本フットサルの方向性”, 第4回日本フットボール学会, 東京, 2006年12月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・慶應義塾大学体育会サッカー部監督, 2006年4月ー2007年1月.
- ・NHK テレビスポーツ教室 「サッカー技術編」 講師, 2006年4月.
- ・関東大学選抜 コーチ, 2007年3月.

研究助成等

“世界のフットサル戦術についての研究”, 慶應義塾学事振興資金 (個人研究 B), 20万円.

村松 憲【専任講師】

著書・論文・報告書

(論文)

- ・Kubo J, Chishaki T, Nakamura N, Muramatsu T, Yamamoto Y, Ito M, Saitou H, Kukidome T, “Differences in fat-free mass and muscle thicknesses at various sites according to performance level among judo athletes”, J Strength Cond Res, 20(3): 654-657, 2006.
- ・Takeshita D, Shibayama A, Muraoka T, Muramatsu T, Nagano A, Fukunaga T, Fukashiro S, “Resonance in the human medial gastrocnemius muscle during cyclic ankle bending exercise”, J Appl Physiol, 101(1): 111-118, 2006.
- ・村松憲, 牛山潤一, 清水静代, 村山光義, 佐々木玲子, “超音波法を用いた塾生の形態評価について”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 46(1): 17-24, 2007.
- ・村山光義, 村松憲, 佐々木玲子, 清水静代, 野口和行, “動作映像の即時フィードバックを用いた技術指導の効果ーフライングディスク・サイドアームスロー導入時の事例ー”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 46(1): 1-15, 2007.

(執筆)

- ・佐々木玲子, 村松憲, 村山光義, 吉田泰将, “新・体育理論”, 慶應義塾大学出版会, 2006.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・財団法人日本オリンピック委員会強化スタッフ (医・科学スタッフ), 通年.
- ・財団法人日本オリンピック委員会強化スタッフ (情報, 戦略スタッフ), 通年.
- ・財団法人日本テニス協会スポーツ科学委員, 通年.
- ・ア式蹴球保存会会長, 通年.
- ・日本テニス学会運営委員, 通年.

研究助成等

- ・“映像による即時フィードバックを用いた運動学習システムの開発と応用”, 慶應義塾学事振興資金 (共同, 研究代表者: 村松憲), 80万円.
- ・“塾生の身体機能および形態の特徴とその機能に関する研究”, 慶應義塾学事振興資金 (共同, 研究代表者: 佐々木玲子), 80万円.

加藤 幸司【専任講師（有期）】

著書・論文・報告書

(論文)

- ・加藤幸司, “バドミントン競技における時間分析—大学生プレーヤーのダブルスについて—”, 慶應義塾大学体育研究所紀要46(1): 25-31, 2007.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・慶應義塾体育会バドミントン部コーチングアドバイザー, 通年.

研究助成等

- ・“スイングスピード計測システムの開発と運動指導への適用プログラムの作成”, 慶應義塾学事振興資金(共同, 研究代表者: 村山光義), 80万円.

奥山（清水）静代【専任講師（有期）】

著書・論文・報告書

(論文)

- ・ Shimizu S, Muraoka Y, Ohmori F, Kagaya A, “Relationship between cardiac muscle, skeletal muscle mass and vessel structure in elderly women” , Jap J Physical Fitness Sport Med, 55 Suppl: S213-S216, 2006.
- ・ Kagaya A and Shimizu S, “Circulatory Functions to Maintain High Quality of Life in Elderly”, Int J Sport Health Sci, 4: 304-315, 2006.
- ・ Ohmori F, Shimizu S, Muraoka Y, Matsuda M, Kuno S, Kagaya A, “Blood flow during graded, submaximal static handgrip exercise at different intensities in elderly and young women”, Int J Sport Health Sci, 4: 480-488, 2006.
- ・ Ohmori F, Shimizu S, Hamaoka T, Kagaya A, “Blood flow after contraction of short duration reaches its peak by 3rd cardiac cycle”, J Physical Fitness Sport Med , 55 Suppl: S153-S158, 2006.
- ・ Yoshizawa M, Shimizu S, Kagaya A, “Changes in brachial and femoral artery vascular conductance in non-exercising limbs during handgrip exercise”, Jap J Physical Fitness Sport Med 55 Suppl: S159-S162, 2006.
- ・ Muraoka Y, Shimizu S, Fukunaga T, Nishijima T, Kuno S, Mastuda M, Kagaya A, “Relationship between forearm muscle volume and pressure response during static handgrip in elderly women”, Int J Sport Health Sci, 4: 440-450, 2006.
- ・ 村松憲, 牛山潤一, 清水静代, 村山光義, 佐々木玲子, “超音波法を用いた塾生の形態評価について”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 46(1): 17-24, 2007.
- ・ 村山光義, 村松憲, 佐々木玲子, 清水静代, 野口和行, “動作映像の即時フィードバックを用いた技術指導の効果—フライングディスク・サイドアームスロー導入時の事例—”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 46(1): 1-15, 2007.

学会発表等

- ・加賀谷淳子, 加茂美冬, 大森芙美子, 岩館雅子, 佐藤耕平, 清水静代, 長田卓也, 定本朋子, 齊藤満, “動的膝伸展運動時の負荷増加に対する活動肢血流量, 筋放電増加率及び筋酸素動態との関係”. 第61回日本体力医学会大会, 兵庫, 2006年9月.
- ・大森芙美子, 加茂美冬, 岩館雅子, 清水静代, 加賀谷淳子, “膝伸展運動時の大腿動脈血流量が最高値に達する負荷の検討”, 第61回日本体力医学会大会, 兵庫, 2006年9月.
- ・清水静代, 大森芙美子, 岩館雅子, 佐藤耕平, 加賀谷淳子. “筋活動期および活動休止期における大動脈血流速度と活動体肢血流速度の対応”, 第14回日本運動生理学会, 広島, 2006年7月.
- ・加賀谷淳子, 清水静代, 大森芙美子. “律動的運動による静脈血流出量の増加は動脈血流入量の増加を促進するか”, 第14回日本運動生理学会, 広島, 2006年7月.
- ・大森芙美子, 清水静代, 村岡慈歩, 佐藤耕平, 加賀谷淳子. “静的掌握運動時の主観的筋疲労感覚と血圧急上昇負荷との関係”, 第57回日本体育学会, 青森, 2006年8月.

- ・村山光義, 村松憲, 佐々木玲子, 清水静代, 野口和行. “動作映像の即時フィードバックを用いた技術指導の効果”, 第57回日本体育学会, 青森, 2006年8月.

研究助成等

- ・“運動時における循環調節機構の統合的解明—スポーツによる健康・体力づくりプログラムの構築に向けて—”, 平成16年～20年文部科学省学術フロンティア推進事業 (共同, 研究代表者: 加賀谷淳子).
- ・“塾生の身体機能および形態の特徴とその機能に関する研究”, 慶應義塾学事振興資金 (共同, 研究代表者: 佐々木玲子), 80万円.

西村 忍【助手 (嘱託)】

著書・論文・報告書

(論文)

- ・Osanai H, Nishimura S, Nakao Y, Sakurai T, Ito T, “The change of autonomic nervous activity after isokinetic exercise”, Jap J Physical Fitness Sport Med, 55 Suppl: S163-S168, 2006.
- ・Nishimura S, Nakazato K, Nakajima H, “The comparative studies of prophylactic ankle braces: The investigations of x-ray stress films, questionnaire, and performance tests”, Jap J Ortho Sport Med, 26(2): 32-42, 2007.
- ・Nishimura S, “A comparative study of physical characteristics between Keio university students with and without experience of high school athletic club activities”, Bulletin of The Institute of Physical Education, Keio University, 46(1): 33-38, 2007.

(執筆)

- ・西村忍, “骨折時のトレーニングの考え方”, Training Journal, 329: pp20-25, ブックハウス・エイチディ, 2007.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・慶應義塾大学体育会アメリカンフットボール部ヘッドトレーナー, 通年.
- ・慶應義塾大学体育会サッカー部女子メディカルアドバイザー, 通年.
- ・第3回 IVY-SAMURAI BOWL オフェンスラインコーチ, 2006年6月.
- ・第11回 NFL グローバルジュニア世界選手権 U-19 日本代表アメリカンフットボールチームヘッドトレーナー, 2006年12月-2007年2月.

牛山 潤一【助手 (嘱託)】

著書・論文・報告書

(論文)

- ・Akima H, Ushiyama J, Kubo J, Fukuoka H, Kanehisa H, Fukunaga T, “Effect of unloading on muscle volume with and without resistance training”, Acta Astronautica 60: 728-736, 2007.
- ・村松憲, 牛山潤一, 清水静代, 村山光義, 佐々木玲子, “超音波法を用いた塾生の形態評価について”, 慶應義塾大学体育研究所紀要. 46(1): 17-24, 2007.

(報告書)

- ・笹川俊, 牛山潤一, 栗原俊之, 神崎素樹, 福永哲夫, 金久博昭, “ヒト静的立位姿勢制御における下腿三頭筋の貢献”, 2006年度東京体育学研究, pp59-64.

学会発表等

- ・牛山潤一, 高橋裕司, 牛場潤一, 正門由久, “運動競技歴が脳波一筋電図コヒーレンスに及ぼす影響～バレリーナとウェイトリフターを対象に～”, 第34回日本体育学会東京支部学会大会, 東京, 2007年3月.
- ・牛山潤一, “筋感覚研究における機械的振動刺激法の有用性”, 第23回筋電図の会 (依頼講演), 兵庫, 2006年9月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・貯筋マイスター認定講座講師（「基礎生理学」「トレーニング科学」），通年.

研究助成等

- ・“姿勢調節のメカニズムを末梢感覚神経活動から解明する”，文部科学省科学研究費（若手研究（B）），130万円.
- ・“塾生の身体機能および形態の特徴とその機能に関する研究”，慶應義塾学事振興資金（共同，研究代表者：佐々木玲子），80万円.

当年中の研究教育活動の概要

2006年度は，所内プロジェクト研究「Nice Body への道」における姿勢動揺測定，理工学部富田・牛場研究室との脳波－筋電図コヒーレンスに関する共同研究（塾内機関誌「Open」上で紹介させて頂いた）に主に着手した．いずれもスタートを切ったばかりの研究テーマであるが，少しずつ成果もあがりつつある．2007年度はペースをあげてこれらを原著論文にまとめる作業に取り掛かりたい．

2. 所内定例研究会発表要旨

第1回 4月25日

牛山 潤一

静止立位姿勢制御のメカニズムを探る

ヒトの静的立位姿勢保持は、その動揺のほとんどが足関節周りに生じているという仮定のもと、足関節周りに矢状面で振動する倒立振子として近似されることが多い。従って、この振り子を安定化するためには、足関節トルクを適切に調節することが必要であり、そのメカニズムとして、下腿三頭筋の粘弾性のみが振子の復元力を供給しているとする粘弾性制御 (Winter et al. 1998, 2001)、および中枢神経系が身体のキネマティクスをモニターし、下腿三頭筋の活動を逐次調節しているとする神経制御 (Fitzpatrick et al. 1992)、2つの方策がこれまでに提案されてきた。

発表者らはこれら2つの方策にはいずれも問題点が存在することから、「ヒトは、粘弾性制御、神経制御というこれまで提案されてきた2つの異なる制御様式を折衷的に用いることで、静的立位姿勢を効率的に制御しているのではないか」という新たな仮説をたて、実験を行った。被検者には、下腿三頭筋の筋トーンが異なると考えられる3つの足関節角度条件下（底屈10度、底背屈0度、背屈10度）で静的立位保持課題（30秒間）を行ってもらい、その際の腓腹筋・ヒラメ筋の筋電図（EMG）ならびに足関節角度変化の自己／相互スペクトル解析から上記仮説の検証を試みた。

結果、全角度条件、両被験筋のEMGには、1Hz以下および10Hz付近に特徴的な成分がみられ、EMGと足関節角度の相互スペクトル解析の結果、前者が身体動揺に応じて調節されているのに対し、後者は身体動揺と無関係に調節されていることが明らかになった。また、筋活動パターンを両被験筋間で比較した結果、腓腹筋は身体のキネマティクスに応じ

て相動性に活動し、ヒラメ筋は緊張性の活動により足関節周りの粘弾性を高める働きに特化していることが示唆された。

以上より、ヒトは、神経制御および粘弾性制御という2つの異なる方策と、それぞれの方策に適した足底屈協働筋を巧みに用いることにより、静的立位姿勢制御という課題を達成しているものと考えられた。

今後は、本発表においてご質問いただいた膝関節・股関節筋群の貢献にも目を向け、より多角的な視点から、ヒトの静止立位制御のメカニズムに迫っていきたい。

西村 忍

人工芝グラウンドについて

人工芝グラウンドは、近年さまざまなスポーツ現場に採用されるだけでなく教育現場においても土グラウンドの代わりとして採用されるケースが多くなっている。そこで本発表は、人工芝に注目し人工芝の歴史と進化、メリットとデメリット、そして損傷の傾向と対策について検討を行った。

人工芝がスポーツ用グラウンドとして初めて使われたのは、1966年アメリカ合衆国南部、テキサス州ヒューストンにあるアストロドームと言われている。日本では1976年に後楽園球場が初めて国内スポーツ施設用に採用した。当時は、織物式人工芝と呼ばれる、基布に天然芝の葉に似た色の形のパイルを取り付けた人工芝シートであったが、現在主流となっている人工芝はロングパイル人工芝と呼ばれる、擬似芝（パイル）が長いタイプで充填材には珪砂やゴムチップなどが使われているものである。

人工芝グラウンドのメリットとしてよく言われるものは、①日常の維持・管理は容易で補修工事がほとんど不要である、②撒水の不要と砂塵がほとんど無い、③多目的使用に対する制限が少なく天候や気象に影響されにくいなどがある。一方、デメリットとしては、

①イニシャル（導入）コストが高い、②人工芝の補償期間と損傷時の補償対応が明確でない、③人工芝グラウンドと運動障害などの損傷に関する研究が少なくどれくらい影響を受けるかまだ明確でないなどがある。

人工芝グラウンドの損傷傾向について土グラウンドと比較した研究発表によると、人工芝グラウンドでは関節外傷と筋損傷が多く発生していた。特に、下肢における損傷は有意に多く発生していた。損傷部位別に見ると膝関節における損傷件数は土グラウンドと比較して2倍であった。大腿部では、肉離れが多く引き起こされている傾向にあった。特徴的な損傷に対する対策として挙げられるのは、摩擦係数の小さい固定式のスパイクを履くなどの環境要因を考えると疲労を強く感じるなどの選手達による主観的意見を考慮して、練習前後のストレッチなどを念入りに行うなどの対応が必要であると思われる。

第2回 6月6日

加藤 幸司

バドミントンのスマッシュに関する研究(2)

3次元映画分析法を用いて、バドミントンのスマッシュについて解析した。被験者は大学の男子トッププレイヤー4名と女子トッププレイヤー1名であった。2台の16mm 高速カメラで撮影スピードを250コマ/秒、露出時間をそれぞれ1/1500秒、1/1250秒としジャンピング・パワースマッシュを撮影した。分析試技は15試技（男子11試技、女子4試技）であった。今回は、ラケットヘッドの速度とシャトルの打ち出し速度に注目し、検討を加えた。その結果、ラケット中心の最高速度とシャトルの最高速度の間には有意な相関は認められなかった。シャトルの最高速度に対するラケットの最高速度の寄与率が大きくなかった原因として、ラケット面へのシャトルの当たり方の問題が考えられた。これは、ラケットが前方にスイングされているだけで

なく、ラケットの長軸と並行する回転軸を中心にラケットが回転していることが観察されるからである。また、ラケットフレームの速度分析から、ラケットが前腕回外位より前腕回内位に回転させられていることが推察された。最後に、ラケットフレーム速度の交叉点からインパクトまでの時間の長短が、パフォーマンスとどのように関係しているかということ、ヒッティング・ポイントとパフォーマンスの間にどのような関係があるかということが今後の課題として残された。

奥山(清水) 静代

高齢者における上肢作業能力

成人の体力は加齢に伴って低下する。その中であって、筋持久力は加齢の影響が比較的少ないとされる体力要素である。特に上肢はその傾向が強いとされてきた。このような結果は、最大筋力の低下度や相対的に一定強度の運動を持続させることのできた時間から評価したものであった(Bembenら1996)。しかし、このようなテストは最大努力を要求するテストであり、高齢者に適しているとはいえない。そこで、本研究では、負荷上昇に対して血圧が非直線的に急上昇する負荷を求め、血圧を顕著に上昇させることなく作業のできる負荷の最大値を求めた。すなわち、仰臥位安静の後、30秒間の静的掌握運動を30秒の休息を挟んで繰り返した。負荷は女性2kg、男性2.5kgから2kgあるいは2.5kgずつ漸増した。負荷テスト中は血圧をモニターし、負荷の増加に対して、血圧の上昇が急峻になったことが確認された時点でテストを中止した。血圧が急上昇する負荷(BPcrit)は、負荷—血圧関係から得られた2本の回帰直線の交点とした。

その結果、静的掌握運動を行った場合、血圧が急上昇する負荷（血圧変移点負荷）は、加齢にともない有意に低下し、年代別でみると、60、70歳代は50歳代と比較して有意に低

値を示した。また、近赤外線分光法により活動筋の筋酸素動態を測定した結果、橈側・尺側屈筋群における筋酸素化 Hb、脱酸素化 Hb 濃度は負荷に対して非直線的で負荷が高くなると酸素化 Hb は顕著に減少し、脱酸素化 Hb は増加傾向にあった。各パラメータが負荷に対して急激に変化する負荷と、血圧変移点負荷との関係をみると有意な相関関係がみられた (ulnar/HHb: $p < 0.05$, O₂Hb: $p < 0.01$) ことから、血圧が急上昇する負荷は脱酸素化が顕著に亢進を開始する負荷と密接な関係にあり、血圧変移点は筋の代謝性変移点を示すものであることが明らかとなった。

第3回 6月27日

村松 憲

研究プロジェクト

「Nice Body への道2005」報告

2005年度に、塾生の形態・体力に関する研究プロジェクト「Nice Body への道 2005」を行った。計14日間に、165名（男子90、女子75名）の形態、体力を測定した。測定項目は身長・体重・体脂肪率・上腕長・上腕周囲長・大腿長・大腿周囲長・皮脂厚（上腕前・後部、大腿前・後部、腹部、背部）・筋厚（上腕前・後部、大腿前・後部、腹部、背部）・筋硬度（上腕部、大腿部）・血圧・血管壁厚・筋力（肘伸展・膝伸展）であった。測定前に、測定を途中で中止できることや起こりうる危険性などを文書で説明した上で、同意書を得た。塾生の募集については、体育研究所のホームページ、学事センター横掲示板、体育研究所内掲示、授業でのチラシ配布などで知らせた後、メールにより受け付けた。測定後、結果を集計し、5段階評価表を作成した。今後は、被験者数を増やすのみならず、1）縦断的測定によって運動習慣・生活習慣に関心を持ってもらう、2）対象を地域住民の方や教職員に拡大し、幅広く測定を行っていく、などの発展性が考えられる。

須田 芳正

塾サッカー部のリサーチ分析について

塾サッカー部が行っているリサーチ分析の報告を行った。

【対象試合】

4月16日 対 東海大学 0:2 ●

4月22日 対 帝京大学 2:1 ○

【使用したソフト】

データストライカー

【集計内容】

先発ホットフォーメーション

エリア別ボールタッチ数

30m ライン進入 攻撃パターン

30m ラインに至った詳細

【考察】

勝利を収めた帝京大学戦においては、先発ホットフォーメーションのバランスがよく、30m ラインに至ったパスにおいてもロング、ミドル、ショートパス全て30数回と、いろいろなパターンの攻撃からゴール前に進入していることが考えられる。

逆に、敗戦した東海大学戦では、先発ホットフォーメーションにおいて、ディフェンスと中盤の選手のバランスが悪く、30m ラインに至ったパスもロング、ショートパスが18回と19回に対してミドルパスだけが31回と多く攻撃パターンが単純であることがわかる。また、クリアの数が帝京大学戦の3回に対して15回としっかりとビルドアップできていないこともわかった。

第4回 7月25日

植田 史生

剣道における段位制と称号について

近代の武道で段位制を取り入れたのは講道館柔道が最初であった。しかし、この段位制は、江戸時代の「囲碁と将棋」における仏教の「九品浄土」の思想による段位とは異なっていた。門下の修行者を指導する上にも奨励する上にも、目録、免許、皆伝というような

段階を設けず、一層階級を多くして、昇級の機会の早く来るようにするのが便利と考えられた。警視庁では、明治18年頃に「級」制度によって技術の格付けを行っていたが、明治44年「中学校令施行規則」の一部改正により、撃剣および柔術が体操の教材として行なわれることになった。これより、教材として基準・統一が必要になり、全国一律に行う事のできる剣道形の制定と、階級名称の統一が急務となり、大正元年に大日本帝国剣道形を制定し、大正6年剣道も柔道と同じ「段位制」をとる事に一本化した。しかし、当面は「五段」までとし、その上に精練証（後に「錬士」と改称）・教士・範士の称号を置く、段と称号の二層方式にした。剣道で「六段」以上が認定される事になったのは、昭和12年6月からであり、ここにいたって初めて称号と段位を併用する「称号・段位制」が確立した。戦後、称号・段位制を復活するに際し、柔道は、称号を廃止し、講道館の段位に統一したが、剣道と弓道は、称号と段位を併用して今日に至っている。平成12年4月1日施行の「剣道称号・段位審査規則」において「九段・十段」を条文から削除し、審査も行わない事を決めた。その理由は、「称号・段位を通じ、範士を最高位とする」(第2条)であった。しかし、称号と段位は別の価値をもった基準であり、「九段・十段位」を明治時代の成立過程から鑑み、文化と伝統をふまえ、再考する必要があるのではないかと考えられる。

野口 和行

自然体験活動におけるゲームの実践とスポーツ場面での応用

人と人の関係、人と自然の関係、自然と自然との関係などを見つめなおすことを目的としている野外教育では、自然体験活動を教材としている。従来から行われてきたアクティビティ（登山、野外炊事、キャンプファイアー等）は、自然体験活動の構成要素である「ひ

と」、「場所」、「時間」による影響が大きい。自然体験活動による教育的効果を効率よく高めるためには、アクティビティの構造化が必要である。そこで、自然体験活動をさまざまな目的のために教材化（ゲーム化）する試みが行われている。

人と関わることを学ぶアクティビティとして、ASE や、PA が開発されている。ASE は、個人では解決できないさまざまな課題に対して、8名～10名程度のグループが協力しながら課題を解決することにより、人間関係に必要な信頼や協調性を育もうとするアクティビティである。ASE においては、課題を解決する過程と、その後の振り返りを通じてグループのコミュニケーションを図り、グループの信頼感や協調性を高めていく。PA は、冒険教育を目的とした OBS の理念を既存の学校組織に組み込むことを目的にアメリカ合衆国で設立された冒険教育の組織であり、ハイレメントやローエメントと呼ばれるアクティビティがある。これらのアクティビティは、近年、さまざまなスポーツの現場でも取り入れられるようになっている。

学校教育への導入としては、集団宿泊学習で半日から1日程度の体験としてPAを取り入れている学校が増えている。また、体育の教科では、「体づくり運動」の一環として運動を通じた仲間との交流が取り上げられるようになり、「アドベンチャー運動」としてASEの実践、その他総合的な学習の時間における実践も見られるようになっている。

日本サッカー協会では、各年代のユース代表チームにおけるチームビルディングの一環としてASEが活用されている。また、子供たちに「スポーツ」と「人間教育」を通じて、心身の健全な発達を促すことを目的とした「日本型育成システムの確立」を目指す組織的なプロジェクトとして実施されているJリーグ・アカデミーでも、ASEや自然体験活動が取り入れられている。自然体験活動を教

材化することは、場所という要素にそれほど依存しなくても実施できる、短時間でも実施できる、課題が明確になっているため比較的评价がしやすい等のメリットがある。その一方、「手段」の「目的化」、体験の操作が行われやすい、マニュアル化によるアクティビティの硬直化などの弊害があることも指摘されており、それらの弊害を克服するためのプログラム開発や研究が必要となっている。

第5回 10月3日

加藤 大仁

2004年のプロ野球ストライキについて

2004年9月、日本のプロ野球史上初めてストライキが実行され、2日間で計12試合が中止された。ストライキに至った直接の契機は近鉄、オリックスの統合問題であり、2004年度はシーズンを通じて選手会とオーナー会議の対立が続いた。その結果、プロ野球界の抱える様々な問題が露わとなり、野球ファンのみならず多くの一般市民の関心を集めることとなった。

近鉄がオリックスとの統合を決断せざるを得なかった最大の理由として、球団の赤字体質が挙げられる。そもそもプロ野球の各球団は株式会社であるが、完全独立採算制で経営を行っているチームは無く、赤字が発生した場合は親会社からの損失補填を受けて何とか存続してきたというのが実情である。実際1954年の国税庁通達『職業野球団に対して支出した広告宣伝費等の取り扱いについて』でも、補填金を親会社による広告宣伝費とみなし、損金として全額計上できるとしている。その結果、各球団の一義的な存在理由は親会社の広告活動のためということになってしまい、「球界全体」としてプロ野球を魅力あるものにしようというインセンティブが欠けてきたであろうことは想像に難くない。プロ野球のゲームは特定のチームが常に勝ち続けてしまうようでは面白みに欠け、ひいては球界

全体が衰退の方向に向かいかねない特殊なエンターテインメント産業である。従って個々の球団の都合に優先するものがあるという意識を球界全体で共有することが肝要であり、今後収益金の分配方法等に関して新たな仕組みを考えていく必要がある。

ところで選手会側はプロ野球機構側(NPB)に対し、労働組合としての立場で球団の統合問題についての団体交渉を要請した。この要請に対しNPB、各球団は、合併は経営事項であるとして交渉に応じなかった。そこで選手会側は、NPBとの関係で球団の統合に関して団体交渉を求める地位にあることを仮に定める地位保全のための「仮処分」申請を行った。因みにオーナー側は従来より「プロ野球選手は労働者ではない」というスタンスを取ってきた。この考え方は労働基準法第9条をかなり厳格に解釈したものと言えよう。

東京地裁、東京高裁共に選手会の仮処分申請を却下したが、選手会が労働組合であることは認めた。また東京高裁は以下のような判断を示している。

コミッショナーには、著名な法律家が就任しており、当裁判所が原告人の団体交渉権について上記のような判断を示しさえすれば、相手方は、同月9日からの交渉において、これを尊重し、実質的な団体交渉が行われることが期待される。また、万一、相手方が誠実交渉義務を尽くさなければ、労働組合法第7条2号の不当労働行為の責任を問われる可能性があるばかりでなく…。

これはNPB側に対して選手会との誠実な交渉を促す勧告ともとれる内容である。

2004年のストライキでは、世論やマスコミの圧力もあって、オーナー会議の意向が覆された。しかしプロ野球界が抱える諸問題が解決の方向に向かって順調に進んでいくかどうかは予断を許さない。引き続きNPB、球団

と選手会の関係を定める法的な整備を進めていくと共に、エンターテインメント産業/コンテンツ産業としてのプロ野球をどのように発展させていくのか考えていく必要がある。

法、社会規範や社会的要請とプロ野球界のあり方に齟齬が生じた場合、当事者が公正に話し合うための場が確立されているかどうかは大きな問題である。日本の企業では伝統的に従業員の発言権が強く、それが意味経営監視機能を担ってきたともいえる。これは企業が社会的責任を果たす上でのベースになってきたともいえるのだが、今後NPB側との話し合いを通じて、選手会がプロ野球界の発展にどのように貢献していくのか大いに注目されるところである。

山内 賢

高齢者への運動プログラムの提供～インターネットを使った介護予防の構想～

研究の大テーマは、介護認定された高齢者への「自宅生活復帰型機能回復システムの考案」である。

近年の新聞・報道でとりあげられるようになった上記高齢者の介護状況の特徴としては、1)入院期間の短縮化傾向、2)家族介護の問題、3)高齢者が自宅で継続できる運動活動システムの不十分さ、4)継続ケアのための情報共有化システムが不十分さ、等があげられる。そして、それぞれの項目では、「高齢者へのADL維持・向上のための介入の機会が減少する」、「自宅復帰を願う高齢者は多いが、本人のADL低下などにより、自宅復帰をあきらめざるを得ない」、「身体機能が低下してしまう」、「自宅と施設間のケアに関する情報が共有化(引継)されるようなフォローアップシステムの構築が不十分となる」といった問題点や影響が考えられる。対策としては、介護状態にならないため、また、介護状態になってしまった時の生活活動における身体機能の維持や自立した生活が維持・継続

するための支援には、運動の関与が重要となるので、病院・施設がかわっても自立ケア情報が共有され、プログラムが継続されるような「運動をテーマとしたマンパワーの介入」とともに「ITを活用した自立ケアに関する情報共有化と生活活動力向上プログラムの実施」を発想してみた。そこで、研究の目標としては以下のことを考えてみた。

①実生活に即した運動・生活活動力向上プログラムを考案する

②考案した運動・生活活動力向上プログラムをITの環境で配信し、自宅で生活する高齢者が継続的に活用できるようにする

③高齢者に自立に対する自覚と自信を持たせる
今年の実績としては、高齢者の健康・体力を維持するために、介護状態になる前の中高年齢者をターゲットとして、運動不足の害をなくすためを目視した「お目覚め体操、お茶の間体操」を考案して映像化してみたことがあげられる。運動の原案としては、「自分の体を動かしたい操」と称したオリジナルな体操を以前から試案していて、「道具なしで、寝たまま、座って、立位で手軽にできる」内容である。作成のコンセプトは、「楽しくできる、どこでもできる、自分にあったものを選べる、継続できる」としていて、以下にその内容を示す。

足の体操：足指運動、足首運動、膝曲げ、足ふみ、足回し、たたく

腰の体操：倒す、伸ばす、まわす、ひねる、たたく

腕の体操：曲げる、伸ばす、捻る、たたく

肩の体操：上げ下げ、肩回し、肩たたき

手のひら体操：にぎにぎ、ぶらぶら、くるくる、指を動かす体操、たたく

首の体操：回す、倒す、捻る

目の体操：目の開閉、目を閉じて眼球を上下左右、くると回して

お口の体操：あける、ちゅーちゅー、横へ、舌の運動

胸の体操：開く、閉じる、深呼吸
今後の展望を以下に示した。

- 1) IT を使ったケアが目指す「ケア力」への貢献
 - ・高齢者のセルフケア能力を高める
 - ・自宅生活・自宅療養を可能にする
 - ・介護負担を軽減する
- 2) IT 技術の活用計画
 - ・運動プログラムを手軽に楽しく継続できるシステムの開発
 - ・個人にあったプログラムの提供
 - ・個人の成果のフィードバック
- 3) 地域包括ケアシステムの構築

吉田 泰将

極東証券寄附講座

「生命の教養学」について

- 1) 極東証券寄附講座の概要
 - ・毎年度500万円が寄附されている。(4年目)
 - ・2005年度には繰越金を含め、135,283円
 - ・支出 2,623,654円
 - ・次年度への繰越金 10,629,229円
 - ・「生命の教養学」「アカデミックスキルズ」を開講
 - ・講師謝金・学生アルバイト代が支出の大半を占めている。
 - ・「生命の教養学」は、年度ごとに内容をまとめて出版している。慶應出版会より、1000部を発刊。経費は別枠。極東証券がほとんどを買い取り。塾内に配布する分を購入している。

2) 「生命の教養学」の趣旨

21世紀は「生命の時代」だという。21世紀の知的核心を形づくる生命科学(分子生物学、脳科学、生殖医療、臓器移植など)の諸問題は、メディア報道も多く、学生の関心も高い、きわめて重要かつ刺激的な領域である。しかし、自分の生に密接に繋がるはずのこれらの問題は多くの場合、社会の最先端で起こっている驚異(すばらしい科)と脅威(おそろし

い科学!)の物語として提示されるだけで、多くの大学生はこれらを「生身の自分」という切実な生の感覚と結びつけて考えることが出来ない。また彼らは、現在の流行には敏感でも、生命科学や生命論が過去の歴史において果たしてきたさまざまな役割については、ほとんど何も知らない。

3) 2007年度の計画

- ・2003年 「生命の魅惑と恐怖」
- ・2004年 「ぼくらはみんな進化する?—脳・性・免疫・科学と社会」
- ・2005年 「生命と自己—今、『自分』が、『生きている』、とは?」
- ・2006年 「生命を見る・観る・診る」
- ・2007年 「誕生と死?その間にいる君たちへ」

今年度の講座『生命の教養学』では、生きることを境界づける「死と誕生」をテーマとして、この2つの対立しつつも1つの大きな過程を構成する極限的な出来事について、様々な分野で活躍する講師陣が真摯な思考を展開する姿を見せることにより、「生命をどう捉えるか?」という問題とその思考法を学生たちに紹介する。人生の大先達である聖路加国際病院理事長日野原重明氏の総合的な視点に立った講義で幕を開け、その後で、他講師陣の講義がつづく。生物学者が受精・誕生・死の問題を自然科学的見地から考察し、人類学者が日本人の死の文化を論じ、医学を学ぶ禅宗の僧侶が宗教と科学の双方の観点から生と死を語り、医学者が妊娠や緊急救命をめぐって医療の現場を紹介する。最終回はまとめの回として、それらの講義から何を学ぶことが出来るのか、講座のコーディネイターが主導する形で、学生とともに考える。

第6回 10月31日

石手 靖

地域住民のスポーツへの関心について

【はじめ】本年5月より「産学協同スポーツ

プロジェクトマネジメント」と銘打って、スポーツを通しての大学（慶應義塾大学）と地域スポーツクラブ（横浜 FC）と企業、そして地域住民四者相互の有益な関わり方を研究している。今回は神奈川県および横浜市によって実施された県民および市民に対するスポーツへの意識調査等の結果から地域に存在する大学および地域スポーツクラブのあり方について考察を加えた。

【方法】それぞれの調査結果を生活・健康・体力・運動・スポーツ・施設（公共及び民間）・スポーツ情報・スポーツ観戦等のキーワード別に分類し分析した。

【考察・結果】①スポーツは豊かな生活を送るためのあくまでも一部分であること ②スポーツに健康と体力を意識していること ③年齢層によりスポーツに関する意識に違いがあること ④スポーツに関する情報発信に期待していること などが示唆された。

【まとめ】大学および地域スポーツクラブにおけるスポーツを通じた活動には、地域の連帯感が希薄化している現状において、地域住民活動の活性化、地域住民相互の交流意識向上への効果が期待されている。その活動は行政を視野に入れる必要があり、情報発信方法の工夫やスポーツに関わるサービスの低価格化は重要な要素である。

村山 光義

日吉設置科目の成績評価方法の現状と課題 —教養研究センター基盤研究調査から—

現在、大学教育に対する社会的な要望の一つに「成績評価方法の厳格化」という課題がある。成績評価は教育目的・目標に強く関係性を持つべきものであり、そのあり方を再認識する必要がある。この問題について発表者は、平成17年度より教養研究センター基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」に参加し、成績評価方法の実態調査班におい

て検討を進めている。この内容は平成18年度末にまとめられる見通しであるが、中間報告を兼ね、日吉設置科目全体の実態を報告するとともに、体育科目の特色・課題などについて比較検討し、今後の体育科目カリキュラムのあり方を考えることとした。

基盤研究調査班では、日吉設置科目の成績評価方法に関する実態調査として、平成17年度の講義要綱・シラバス（日吉）・外国語科目履修案内より、「成績評価方法」の記載内容を集計した。その結果、以下の所見を得た。

- ・成績評価方法に関する記載がないケースは全体の約10%。作成過程に課題がある。
 - ・評価項目として、期末試験が約55%、平常点48%、出席40%が高い比率で採用されていた。平常点・出席は、外国語科目、演習・実験、芸術系ではさらに高い比率であった。
 - ・しかし、平常点の定義は曖昧で、内容の説明があるのは約65%。1/3は単に平常点と記載しているだけ。具体的内容では参加（度）・態度が多かったが、出席・小テスト・レポートも含まれた。また、外国語では予習・宿題・発表、演習・実験・少人数セミナーでは討論が比較的多かった。このことから、多様な評価方法が用いられていることがわかるが、教員各自が個々に用いており、特に平常点のように曖昧なままの現状がある。
 - ・さらに、複数項目を用いる際の比率を明示してあるのは15%程度であり、何が重視される内容であるかも明確ではない。総じて、同じ科目内でも、成績評価規準に関する統一、共通認識などが十分に図られていないと考えられた。
 - ・形成的評価の視点を持つよい事例として、医学部シラバスに見る教育目標（GIO）と細目（SBO）の明記があった。
- 以上のような結果を踏まえ、体育科目の特徴と課題を以下のように考察した。
- ・体育実技については、体育研究所の決めた

評価のガイドラインがある。しかし ABC 境界点数は妥当であるか再度検討が必要。

- ・種目の目標に応じた評価方法の採用を行い、体育実技 A では出席60%、技術・理解・態度から 40% を配点、体育実技 B では到達基準達成で合格という方法を採用している。今後、冊子体で配点比率を明示することを徹底するとともに、この評価方法の特色を十分に説明していく必要がある。
- ・講義・演習における評価方法の厳格化は他の科目同様に重要な課題である。
- ・測定しにくい「向上・体験目標」を評価する試みについて研究していく必要がある。

松田 雅之

陸上競技界における外国人登録問題について

陸上競技における外国人の競技会出場については、日本陸上競技連盟、日本学生陸上競技連合、高体連、実業団等、各所属団体によってその規定が異なっている。高体連や関東学生陸上競技連盟では、すでに外国人留学生が大会に出場するための条件が決められている。特に、駅伝競走では外国人は 1 名しか参加できず、しかも高校駅伝では最長区間の 1 区 (10km) には外国人はエントリーできなくなった。また、箱根駅伝でも外国人の出場枠を 1 名と規定に乗せている。しかしながら、日本学生陸上競技連合では現在も外国人の大会出場における人数制限は設けていない。かつて、日本学生陸上競技連合の主催する女子駅伝において全 6 区間のうち 5 区間で外国人留学生が出場したり、全日本大学駅伝には複数の外国人留学生がエントリーされている大学が出場している。ここには、日本学生陸上競技連合としての問題が含まれている。新設大学を認可するときに、国際学部などの設置等、外国人留学生の受け入れを、国が要請することが多い。それにより、外国人枠というものを作るとは、外国人留学生への差別として捉えられる危険性がある。日本学生陸上

競技連合だけが外国人枠の制限に消極的になっている 1 つの理由がここにあると思われる。日本の陸上競技における外国人留学生の多くは長距離選手であり、ケニアやモロッコなどのアフリカからの留学生が駅伝の助っ人的意味合いを持って留学してくる場合が多い。高校でも 1990 年代初めより、留学生が増え、全国的に広まってきている。現在、彼らが樹立した最高記録は、高校記録を上回っていても、外国人最高記録という扱いで、高校記録としては認められていないのが現状である。

力のある外国人留学生の登録問題は、グローバルを唱える大学入学体制や、駅伝を学校の宣伝として力をいれている新設校の柵を受けて、暫くは続いて行く問題であると思われる。

第 7 回 11月28日

綿田 博人

小泉信三について

小泉信三は 1888 年 5 月 4 日小泉信吉と千賀の子として誕生した。普通部から義塾で学び 1910 年慶應義塾大学部政治科を卒業し、義塾の教員として採用される。1912 年より 1916 年までドイツ、イギリス、フランスに留学し、帰国後は経済原論・社会思想史などを講じ、リカード研究者、マルキシズム批判の理論家として名を上げた。1933 年に慶應義塾長に就任し以後 1947 年まで義塾発展・復興のために尽力をつくした。

研究者、教育者としての小泉は、不屈の魂とフェアプレイの精神にあふれた姿は、スポーツマンとしての姿に重なり多くの若者の心をひきつけた。また、戦時色を強めていった 1940 年に「義塾の徽章」を配布し、塾生が協力して義塾の名誉を傷つけないように自覚し、身だしなみや礼節の水準を高めさせた。塾生には常時「塾生訓示」を携帯させた。「塾生訓示」は善を行うに勇あれということばで

締めくくっている。優れた才能を人柄を持つ学生に対しては、思想をこえて教育者としての手を差し伸べ、学問のみならず塾生の幅広い才能と可能性を開花させた。

またスポーツマンとしての彼は、自らテニスの選手としても活躍し義塾の大將もつとめたこともあった。1922年から1932年まで庭球部長の職につき庭球王国慶應を確立した。また、多くの学生スポーツを愛したが特に熱狂的な学生野球ファンであった。1943年の「出陣学徒壮行早慶戦」の挙行にあたり働きかけたことは学生を思っていることであった。1976年には野球殿堂入りした。彼が体育会70周年記念講演で述べた「スポーツが与える三つの宝」は今でも体育会に強く受け継がれている。近代経済学者の先駆者、達意の文筆家、多くの教え子から敬愛された教育者そしてスポーツマンであった小泉信三は常に、塾生と共にいてその一人一人の個性を尊重し、その成長を喜び、その人々のよき先輩たることを期し、塾生と接触する姿は、福沢諭吉がいかに人を愛する人であったかいうことに重なり合う。

篠原しげ子

競技ダンスの運動強度

競技としてのボールルームダンスの運動強度を20歳代の被験者で調べた実験で、ダンス中の心拍数から、酸素消費量を割り出し、運動強度を推定した実験の結果を紹介した。

アマチュアのA級、またはプロの資格を持つ男女10カップルを対象に、ラテン（ルンバ、チャチャチャ、サンバ、パソドブレ、ジャイブ）5種目、モダン（ワルツ、タンゴ、フォクストロット、クイックステップ、ウインナワルツ）5種目、合計10種目の測定を行った。

最大酸素摂取（消費）量は、男性、女性ともアメリカの一般人と比べて大きかった。

ダンス中の心拍数を比較した場合、テンポの速いウインナワルツ、クイックステップチャチャチャ、ジャイブで多い傾向が見られ

たが、種目間に有意な差は見られなかった。以前紹介した実験では、ラテン種目で、心拍数が多かったが、この実験ではモダンもラテンも5種目の平均でみるとほぼ同じ値を示した。

動きをリードする男性と、フォローする女性の役割の違いからくる動きの強度の差は最大心拍数に対する割合での男女間の比較でも差はなかった。

最大酸素消費量に対する割合（%Vo2max）で比較すると男女ともほぼ同じ値であったが、エネルギー消費量に換算すると男女に差があり、有意差が認められた。これは女性の体脂肪の多さが反映されたもので、他の実験での結果でも同様の結果であった。

エネルギー消費量に換算すると男性は女性より多くのエネルギーを必要とし、バスケットボール、スカッシュ、クロスカントリーと同じ労力を必要とする。

競技中のパフォーマンスは著しく激しい運動負荷であることが証明された。

（以上の内容は、1988年 Bri.J.Sports Med 誌上に B.A.BLANKSBY と P.W.REIDY が発表した研究データである）

第8回 12月19日

高嶺 隆二

判例報告「サッカー大会高校生落雷負傷事件（その2）」

―落雷事故は予見できる（最高裁判断）―

平成8年8月13日、大阪府高槻市において開催された「第52回国民体育大会サッカー競技開催決定記念大会兼第10回高槻ユース・サッカー・サマーフェスティバル」に参加した私立土佐高校のサッカー部員が試合中に頭部に落雷の直撃を受け、救命救急センターの手当てで蘇生したが重篤な後遺症を残すことになり、高校の退学を余儀なくされた。このことに関して本人並びに両親、兄の4名は、土佐高校、高槻市、高槻市体育協会ならびに

同市サッカー協会に対し「落雷は予見できた」と言う理由で総額2億6000万円余の損害賠償請求を高知地方裁判所に行った。

これに対し、高知地方裁判所は、平成15年6月30日、「原告らの請求はいずれも理由のないことに帰することである。」として請求棄却の判決を行った。このため高松高等裁判所に控訴したが、平成16年10月29日、ここでも「当日の天候状況では落雷事故の発生は予見不可能であった。」として請求を棄却された。そこで原告らは、最高裁判所に判断を求めた。

最高裁判所は、平成18年3月13日、「引率の教員は落雷を予見できた。」また「高槻市体育協会は本件サッカー大会の主催者であると推認するのが相当である。」との判断を示し、原審を破棄して高松高等裁判所に差し戻した。

差し戻し審では、引率教員が当時落雷事故発生の危険性を具体的に予見していたとすれば、どのような措置を執ることができ、その措置を執っていれば事故の発生を回避できたか、が審理されることになる。

この事件を受けて、日本サッカー協会は雷鳴と競技進行についての指針を発表しているが、学校における部活動の顧問教師はもとより学校設置者の課外活動の管理の在り方に大きな影響を及ぼす判断といえる。

佐々木玲子

塾生の身体機能および形態の特徴とその評価に関する研究

スポーツ・運動を快適に行うためには、身体活動の源である筋の量や身体の組成、およびその身体を動かすための機能を適切に把握することは大切である。塾生の健康な生活を支援する立場の我々にとっても彼らの実態を把握しておくことは必要だと考えられる。筆者らは、その基礎データを収集することを目的に、昨年より塾生の形態および身体機能に

関する測定を開始し、本年度より体育研究所内のプロジェクト研究として継続している。これまでの測定項目の結果の一部ならびにフィードバックを含めた測定の実際については以下の通りである。

計測項目は、身長、体重、皮下脂肪厚、筋厚などの形態および上下肢の静的筋力（肘、膝関節伸展）であった。身長、体重、体脂肪率（BI法）の平均値（男子108名、女子111名）は、これまでに報告された塾生の値と同程度であった。同一箇所における筋厚と皮脂厚の関係には男女で異なる傾向がみられた。大腿周径囲に対する大腿後面の皮下脂肪厚と筋厚の占める割合をみると、大腿周径囲の大きい者ほど、男子では筋厚が厚く、女子では皮下脂肪厚が厚い、すなわち大腿周径囲の増大に対して男子では筋量、女子では皮下脂肪量がそれぞれ関係していることが示唆された。この傾向は大腿前部の筋厚、皮脂厚でも、さらに上肢でも同様であった。また、腹部の筋厚と皮脂厚の関係についてみると、女子では両者に正の相関関係がみられたのに対し、男子では両者には統計的に有意な関係はないもののむしろ逆の傾向にあり、男女で異なる傾向が推察された。

これらの測定によって塾生の特徴を捉えるとともに、十分なデータを蓄積してその結果から標準値を作成し、今後塾生に対して身体の形態・機能を評価、還元するためのシステムを構築できるよう進めていきたいと考える。

第9回 1月30日

近藤 明彦

Enhanceing Children's Sport and Life Experience

オタワ大学のテリー・オーリックの著書「Children and Youth in Sport」の中からスポーツの持つ競争的状況についての問題点を指摘した章についてその概要を解説した。ア

メリカ、カナダにおいて行われる競技スポーツにおいては勝敗に偏向したコーチ、両親等の影響によりスポーツにより、スポーツが楽しいものではないという感じる子供が数多くいるという悪影響について指摘がなされた。特に12歳までの幼少年期における競争行動の影響について考慮する必要が示された。著者は競争的行動ではなく協同的行動をともなうようにゲームの構造を変えて行うことの重要性について述べ、競技スポーツにもこのような配慮が必要であると示唆した。

安藤 勝英

講道館柔道の米国での展開

この度米国柔道協会（USJF）から明治15年嘉納治五郎師範に創始された講道館柔道が米国にどの時代にどのようにして紹介されたか、調査依頼があった。この調査結果以下の

ことが理解できたので報告する。

- ①米国での柔道指導並びに紹介は明治30年、内村外次郎6段（横浜養儀館主）が最初であった。
- ②この後、明治35年以降、塾初代師範であった山下10段、富田7段等が渡米、柔道指導している。殊に、山下10段は明治37年（日露戦争時）当時のルーズベルト大統領に柔道指導したのは有名な話である。
- ③明治、大正、昭和初期にかけて桑島省三氏のシカゴでの10数年の努力により柔道大学の創設。彼はこのように柔道を通し民間外交家としても功績があった。このことから現在でもシカゴ柔道会は非常に盛んである。
- ④現在の日本からの指導について。

これらのことについて、研究報告した。

3. 浅野基金研究補助による研究成果報告

研究課題 身体活動量の違いが末梢血管の
形状および機能に及ぼす影響

研究責任者 奥山（清水）静代

研究実績の概要

【目的】

活動筋への酸素供給は動脈の血管により行われているが、これまで動脈の形態や機能と身体活動あるいは運動との関係についてはあまり注目されていなかった。近年、運動と末梢血管の関係についていくつか報告がみられるが、その多くは対象が中高齢者であり、一般成人についてはあまり見られない。加齢に伴う血管形状の変化を論議するには、成人の血管形状を把握することは極めて重要であると考えられる。そこで、本研究では成人を対象として末梢血管、特に内中膜複合体について明らかにすることを目的とした。

【方法】

血管形態測定の対象は健康な成人男性 88 名、女性 72 名（ 20.6 ± 0.1 歳）の計 160 名であった。被検者には事前に目的と内容、測定にともなう危険性と実験参加の任意性を説明した上で、実験参加への同意を書面によって得た。被検者を仰臥位姿勢とし、安静を保たせた後、総頸動脈内中膜複合体厚を測定した。内中膜複合体厚の測定には循環器用超音波診断装置（logic book, GE 横川メディカルシステムズ）を使用した。まず右側頸部に 10MHz の探触子をあて、B モード法を用いて画像上で血管形状を十分観察し、分岐部にかからない地点を選択して測定位置を決定した。次に、血管縦断画像を鮮明に描出し総頸動脈を記録した。内中膜複合体厚は、深部の壁面を測定壁面とし、内膜の内側から外膜の内側までとし、内中膜複合体厚計測ソフトインティマスコープ（メディアクロス社製）を用いて解析を行った。また、右側上腕部において聴診法によ

り血圧を測定した。

【結果および考察】

本研究で得られた内中膜複合体厚は男性 0.53 ± 0.01 mm、女性は 0.49 ± 0.01 mm であった。成人で得られたこの値は、高齢者で得られた先行研究（清水ら 2003）の内中膜複合体厚（男性 0.81 ± 0.02 mm、女性 0.81 ± 0.01 mm）と比較し有意に低値を示した。加齢にともなう内中膜複合体厚の増加については、中膜における弾性線維においてカルシウム沈着が進行するとともに、弾性線維の変性も進行して壁の伸展性が低下することが原因であると考えられている。次に内中膜複合体厚と血圧との関係は、男性および女性ともに関係はみられなかった。すなわち、高齢者でみられる、安静時の血圧が高値を示すもの者ほど、内中膜複合体厚が高値を示すという関連性はみられなかった。さらに、日常の運動習慣別に内中膜複合体厚をみると、女性において普段特に運動をしていない者（ 0.49 ± 0.01 mm）よりも、定期的に運動を行っている者（水泳部）（ 0.43 ± 0.03 mm）のほうが低値を示した。これらのことから、本研究においては、日常的な運動習慣、すなわち身体活動量の違いが内中膜複合体厚に影響を及ぼす可能性があることが示された。しかし、今後縦断的なトレーニング等を行なわせて、さらに検討する必要があると考えられる。

4. 大学体育連合中央研修会参加報告

冬季中央研修会

報告者：加藤幸司、牛山潤一

開催期間：2006年 1 月 23 日(火)～26 日(金)

開催会場：山形蔵王スキー場

アストリアホテル

今年度の 冬期中央研修会は、「スノースポーツにおけるスキーとスノーボードの技術と指導法を考える」をテーマとして、山形蔵王スキー場にて開催された。3泊4日の研修会には、実技研修、講演、班別研究協議、情報交換会と盛り沢山の内容が詰め込まれ、非常に充実した研修会であった。参加者は総勢86名、技能レベル別にスキー班は6班、ボード班は4班に分類され、実技研修が行われた。加藤は最下級レベルの6班、牛山は5班で研修を行った。初日の夜には渡邊彰（文科省）、

岸宏（全日本スキー連盟）の両氏が、「体育・スポーツ行政の動向」「スキーの今と昔」という演題で講演を行った。両氏のお話はまさに対極に位置するような内容であり、一長一短、体育指導者がこうしたお話をどう理解して現場で生かすべきか、非常に考えさせられる有意義な時間であった。班別の研究協議では、滑走中のビデオを見ながら講師の先生から技術的なアドバイスを受け、受講者同士でも互いに気づいた点を指摘し合うなどして各自の技術向上に役立てる努力がなされた。3日目には夕食を兼ねた情報交換会が開かれ、様々な大学の教育や研究の状況について意見が交わされた。他大学の現状を直接教員の口から聞くことができ、極めて貴重かつ有意義な時間となった。

今回は、3日目まで天候に恵まれなかったが、最終日はすっきりと気持ち良く晴れ上がり、蔵王から雄大な景色も望め、研修のよい締めくくりとなった。

Ⅲ. 教育活動記録

Ⅲ－1. 授業の実施

1. 平成18年度体育科目の履修者統計

1) 体育学講義と体育学演習

平成18年度は、17年度同様に体育学講義 8 コマ、体育学演習 5 コマを開講した。体育学講義のタイトル及び履修者数を表Ⅲ-1-1 に、体育学演習のタイトル及び履修者数を表Ⅲ-1-2に示す。履修者数の合計は体育学講義で

215名（前年比 -33%）、体育学演習で55名（前年比 -27%）となった。講義・演習ともにほとんどのコマで前年を下回る結果となり、単に曜日時限の配置といった問題ではなく、授業内容の啓蒙や告知について検討を進める必要があると考えられる

表Ⅲ-1-1. 平成18年度 体育学講義のテーマ及び担当者

講義名	コマ数			担当教員	履修者数
	春	秋	計		
スポーツの効用を多角的にみる（スポーツ総論）	1		1	村山光義・佐々木玲子・吉田泰将・近藤明彦	14
スポーツ心理学の世界	1		1	近藤明彦	42
スポーツの技と文化を探究	1		1	植田史生・綿田博人・石手 靖・須田芳正	15
スポーツと身体（からだ）の基礎理論	1		1	吉田泰将	85
アウトドアを考える		1	1	村山光義・野口和行	3
アスリートのためのスポーツ科学		1	1	近藤明彦・佐々木玲子・加藤幸司	18
健康と運動の科学		1	1	近藤明彦・齊藤郁夫・辻岡三南子・和井内由充子・森 正明	15
政治社会とスポーツ / スポーツ事故と法		1	1	高嶺隆二・加藤大仁	23

表Ⅲ-1-2. 平成18年度 体育学演習のテーマ及び担当者

講義名	コマ数			担当教員	履修者数
	春	秋	計		
自然体験活動演習	1		1	野口和行	5
アスレチックトレーニング演習	1		1	山内 賢・西村 忍	9
ライフセービング（救急法の基礎）		1	1	山内 賢・西村 忍	18
スポーツメンタルトレーニング		1	1	近藤明彦	17
からだの動きをはかる（バイオメカニクス）		1	1	佐々木玲子・村山光義・村松 憲	6

2) 体育実技 A・B

表Ⅲ-1-3 に体育実技 A・B（ウィークリースポーツ）の担当者とそれぞれの担当種目、表Ⅲ-1-4 に体育実技 A・B（ウィークリースポーツ）の各種目の履修者数を示す。表Ⅲ-1-4に示すように、日吉・三田合計で8443名の申し込み（前年比+5.3%）に対し、最終的に7198名の履修者（前年比+1.7%）となった。三田の履修者数はほぼ変動がなく、日吉で3%程度充足率が向上した。

また、平成18年度は、慶應義塾150年事業に伴い体育研究所棟およびプールが複合施設の

建設のため取り壊しとなった。そのため、従来のトレーニングルーム、エクササイズスタジオが代替施設で実施となった他、プールも年間を通じて民間施設を利用することとなった。トレーニングルームは、日吉体育館前のプレハブ棟の1階部分に設置され、体力アップコースの授業で利用している。筋力トレーニングマシンやエアロバイクを中心とした実技を行う部屋とフリーウェイトを行う部屋を2つ向かい合わせて利用するようになり、ほぼ昨年同様の授業展開が可能となった。エクササイズスタジオは日吉記念館の会議室を改

表Ⅲ-1-3. 平成18年度 体育実技A・B（ウィークリースポーツクラス）担当者及び担当種目

	担当者	種 目
教 授	高 嶺 隆 二	水泳
"	近 藤 明 彦	ウォーキングエクササイズ、体力UP コース
"	安 藤 勝 英	柔道
"	佐 々 木 玲 子	エアロビクス
"	植 田 史 生	剣道
"	綿 田 博 人	野球、ゴルフ
助 教 授	篠 原 し げ 子	ダンス
"	松 田 雅 之	陸上競技、ジョギング、卓球
"	石 手 靖	バレーボール (B)
"	村 山 光 義	バレーボール (A、B)、フライングディスク、ニュースポーツ (B)
"	山 内 賢	ハンドボール、バスケットボール、体力UP コース
"	吉 田 泰 将	剣道
"	加 藤 大 仁	バスケットボール
専 任 講 師	野 口 和 行	ニュースポーツ、バレーボール、フライングディスク (B)
"	須 田 芳 正	サッカー、フットサル
"	村 松 憲	テニス
専任講師(有期)	加 藤 幸 司	バドミントン
"	奥山(清水) 静代	エアロビクス
助 手(嘱託)	西 村 忍	体力UP コース、アメリカンタッチフットボール
"	牛 山 潤 一	体力UP コース
非 常 勤 講 師	李 宇 饒	サッカー
"	石 渡 千 草	ソフトボール
"	大 嶽 真 人	サッカー
"	大 津 信 行	レスリング
"	小 笠 原 清 忠	弓術
"	勝 又 正 浩	ゴルフ
"	加 藤 大 雄	テニス
"	川 西 大 介	アーチェリー
"	菊 地 啓 太	野球
"	菊 池 秀 悦	トランポリン
"	木 塚 孝 幸	バスケットボール
"	島 田 桂 太 郎	ボクシング
"	鈴 木 秀 五 郎	軟式野球
"	竹 村 りょうこ	テニス
"	田 中 由 美 子	フェンシング
"	谷 口 こ ゆ き	バスケットボール
"	手 島 智 佳 子	テニス
"	藤 平 信 一	合気道
"	濱 名 邦 雄	ソフトテニス
"	平 井 克 英	バドミントン
"	堀 場 雅 彦	テニス
"	松 本 健 太 郎	テニス
"	松 山 保 幸	自動車
"	望 月 康 司	ソフトボール
"	安 松 幹 展	フットサル
"	山 田 美 絵 子	バレーボール
"	山 村 貴 央	バレーボール
"	吉 田 武	卓球

表Ⅲ-1-4. 平成18年度 体育実技 A・B (ウィークリースポーツクラス) 種目別履修状況

地区	科 目 名	コマ数			定 員	登録数	倍率	最 終 履修者数	充足率
		春学期	秋学期	計					
日 吉 地 区 開 設	アメリカンタッチフットボール	1	1	2	60	30	0.50	40	67%
	アーチェリー	2	2	2	80	129	1.61	79	99%
	ウォーキングエクササイズ	3	3	4	180	73	0.41	107	59%
	エアロビクス	9	9	18	360	389	1.08	339	94%
	ゴルフ	6	6	12	240	407	1.70	243	101%
	サッカー	12	12	24	912	571	0.63	649	71%
	ジョギング	1	1	2	60	43	0.72	48	80%
	ソフトテニス	1	1	2	60	16	0.27	26	43%
	ソフトボール	2	5	7	192	223	1.16	179	93%
	ダンス	3	3	6	120	147	1.23	122	102%
	テニス	16	16	32	640	1045	1.63	634	99%
	トランポリン	1	1	2	40	47	1.18	40	100%
	ニュースポーツ (A・B)	2	2	4	120	85	0.71	112	93%
	バスケットボール	15	15	30	768	885	1.15	691	90%
	バドミントン	9	9	18	520	672	1.29	526	101%
	バレーボール (A)	5	5	10	400	294	0.74	353	88%
	バレーボール (B)	8	8	16	600	291	0.49	359	60%
	ハンドボール	2	2	4	160	73	0.46	95	59%
	フェンシング	1	1	2	40	40	1.00	44	110%
	フットサル	3	3	6	150	326	2.17	150	100%
	フライングディスク (A・B)	3	3	6	180	98	0.54	135	75%
	ボクシング	1	1	2	60	110	1.83	108	180%
	レスリング	1	0	1	20	2	0.10	3	15%
	剣道	7	7	14	280	113	0.40	131	47%
	合気道	1	1	2	60	65	1.08	61	102%
	自動車	2	2	4	80	115	1.44	80	100%
	柔道	3	3	6	180	55	0.31	57	32%
	水泳	4	4	8	160	113	0.71	125	78%
	体力 UP コース	10	10	20	400	607	1.52	428	107%
	卓球	7	7	14	420	447	1.06	429	102%
	野球	4	4	8	240	114	0.48	146	61%
	軟式野球	1	1	2	60	81	1.35	61	102%
	陸上競技	1	1	2	60	13	0.22	18	30%
	日 吉 合 計	147	149	292	7902	7719	0.98	6618	84%
三 田 地 区 開 設	ダンス	2	2	4	80	124	1.55	81	101%
	テニス	5	5	10	132	143	1.08	115	87%
	バレーボール	2	2	4	101	101	1.00	96	95%
	フットサル	2	2	4	100	146	1.46	100	100%
	弓術	2	2	4	80	85	1.06	76	95%
	剣道	2	2	4	80	24	0.30	24	30%
	合気道	1	1	2	60	72	1.20	59	98%
	柔道	2	2	4	120	29	0.24	29	24%
	三 田 合 計	18	18	36	753	724	0.96	580	77%
全 体 合 計		165	167	328	8655	8443	0.98	7198	83%

修し、エアロビクス、ダンスの授業を展開している。部屋面積がやや減少し、縦長の部屋になった影響から定員を減らして対応した。

表Ⅲ-1-5に体育実技 A・B（シーズンスポーツ）の各種目の担当者及び履修者数を示す。平成18年度より、プール実施であった水泳を「オープンウォータースイミング」として合宿種目に転換した。この種目は、海洋での遠泳競技を母体に、水泳技能を養うほか、シュノーケリングやシーカヤックなどの体験を盛り込んだ総合的な海洋実習である。前年までの水泳の履修者規模よりは小さくなったが、特色ある授業内容として今後さらに発展させる意向である。シーズンスポーツ全体としては、履修者数は前年と同じ368名であったが、充足率は75%（前年比 +11%）に向上した。



表Ⅲ-1-5. 平成18年度 体育実技 A・B（シーズンスポーツクラス）担当者及び履修状況

	月	科 目 名	担当者	定員	登録数	倍率	最終 履修者数	充足率
春 学 期	7 ― 8 月	空手	蓮池敬一郎	40	16	0.40	28	70%
		弓術	齋藤 隆男	40	85	2.13	39	98%
		水泳（オープンウォータースイミング）	鷲見 全弘	25	8	0.32	12	48%
		馬術（Ｂ）	細田 壮一	36	76	2.11	36	100%
		山岳（Ｂ）	丸 誠一郎	20	8	0.40	14	70%
		ヨット（Ｂ）	金子 隆司	40	34	0.85	39	98%
秋 学 期	9 月	アウトドアレクリエーション（Ｂ）	野口 和行	50	51	1.02	51	102%
		器械体操	首藤 聡史	30	22	0.73	29	97%
		端艇	月村 繁雄	20	6	0.30	7	35%
		バレーボール（Ｂ）	石手 靖	30	18	0.60	25	83%
	2 月	スキー（Ｂ）	吉田 久男	120	28	0.23	48	40%
		スケート（Ｂ）	小山 正	40	39	0.98	40	100%
計				491	391	0.80	368	75%

2. 授業評価の実施

体育研究所では、より適切な授業展開のための基礎資料を得ることを目的に、体育実技を履修した学生による授業評価を実施している。

アンケートの回答数及びアンケートの質問項目を表Ⅲ-1-6、表Ⅲ-1-7に示す。アンケートの各質問項目には、「強く思う」（5点）から「まったくそう思わない」（1点）までの5段階で回答させ、得点化して評価した。

表Ⅲ-1-6. アンケート回答者数

	アンケート総数
春学期ウィークリー	2389
秋学期ウィークリー	2045
秋学期講義・演習	64
シーズン	274

1) 体育実技ウィークリー種目の授業評価

春学期および秋学期ウィークリー実技における各項目の全体の平均値と標準偏差を図Ⅲ-1-3、4に示す。学期間には差はほとんどなく、同じ傾向が得られている。

例年と同じように全般に4点以上の肯定的評価がほとんどであった。平均値で最も高い評価となったものは、「教員はこの授業につ

いての十分な知識を持っていた」であった。また、目的の説明や話し方、教授法の適切さ等の教員に対する評価項目が高い得点であった。一方、最も平均点が低いものは、「この授業によって運動技術が向上した」であり、「この授業によって知識を深めることができた」「運動量は適切であった」といった項目も全体の中では比較的低い評価であった。以上の傾向は昨年とまったく同様であった。

表Ⅲ-1-8、9には各項目の種目別の集計を春学期、秋学期別に示した。評価点が低かった「この授業によって運動技術が向上した」において、3点台となったのが、ニュースポーツ、ウォーキングエクササイズ、ジョギング、アーチェリー、フェンシング、自動車などであった。また「運動量は適切であった」においても、ニュースポーツ、自動車、フェンシング、アーチェリーが3点台の評価となっている。これらの種目には、メジャーなスポーツにはない特徴も挙げられる。授業展開上、導入部分の説明や実践に比較的長い時間をかける必要があるため、運動量の不足や、技術向上の速度が緩やかになってしまうのかもしれない。しかしながら、「授業は満足できるものであった」の項目ではそれほど低い評価ではなかった。授業のゴール（目標）とするレベルなどを履修者に認識してもらう努力も引き続き必要であろう。

表Ⅲ-1-7. アンケート調査用紙（表裏）

平成18年度体育科目（講義・演習・実技）履修者アンケート

慶應義塾大学体育研究所

このアンケートは、FD「Faculty Development：大学教員の資質開発（授業内容、方法の改善・向上）」をめざして行われるものです。皆さんの意見を次年度以降の授業に反映させるとともに、今後の塾内のスポーツ振興に対して役立てる目的以外には用いませんので率直な意見をお聞かせください。

・科目名を記入してください _____

・担当教員名を記入してください _____

・曜日時限に○印（月・火・水・木・金）曜、（1・2・3・4）限

・実施地区に○印 日吉 ・ 三田

● 受講した授業についての以下の質問に関して、

5 _____ 4 _____ 3 _____ 2 _____ 1
 強くそう思う そう思う どちらとも言えない そう思わない 全くそう思わない
 の5つの中から一番当てはまる番号に○印を付けてください。

履修者全員（講義・演習・実技）回答

- | | |
|-----------------------------|-------------------|
| 1. 教員は授業の目的および目標をわかりやすく説明した | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 2. 教員の指導・教授方法は適切であった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 3. 教員はこの授業についての十分な知識を持っていた | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 4. 教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 5. 教員の話し方は聞き取りやすかった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 6. この授業は塾生にとってふさわしいものだった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 7. この授業は自分にとって満足出来るものであった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 8. この授業によって知識を深めることができた | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 9. この授業の内容は興味のあるものだった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 10. このクラスの雰囲気は良好であった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 11. 自分はこの授業に意欲的に取り組んだ | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |

実技履修者のみ回答

- | | |
|------------------------|-------------------|
| 12. この授業は健康や体力の向上に役立った | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 13. この授業によって運動技術が向上した | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 14. 運動量は適切であった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |

講義・演習履修者のみ回答

- | | |
|---------------------------------|-------------------|
| 15. この授業では配布資料やプレゼンテーションが適切であった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
|---------------------------------|-------------------|

裏面へ続きます

●自由記述 1

授業内容について
よかったこと：

改善を要すること：

●自由記述 2

教員について
よかったこと：

改善を要すること：

●自由記述 3

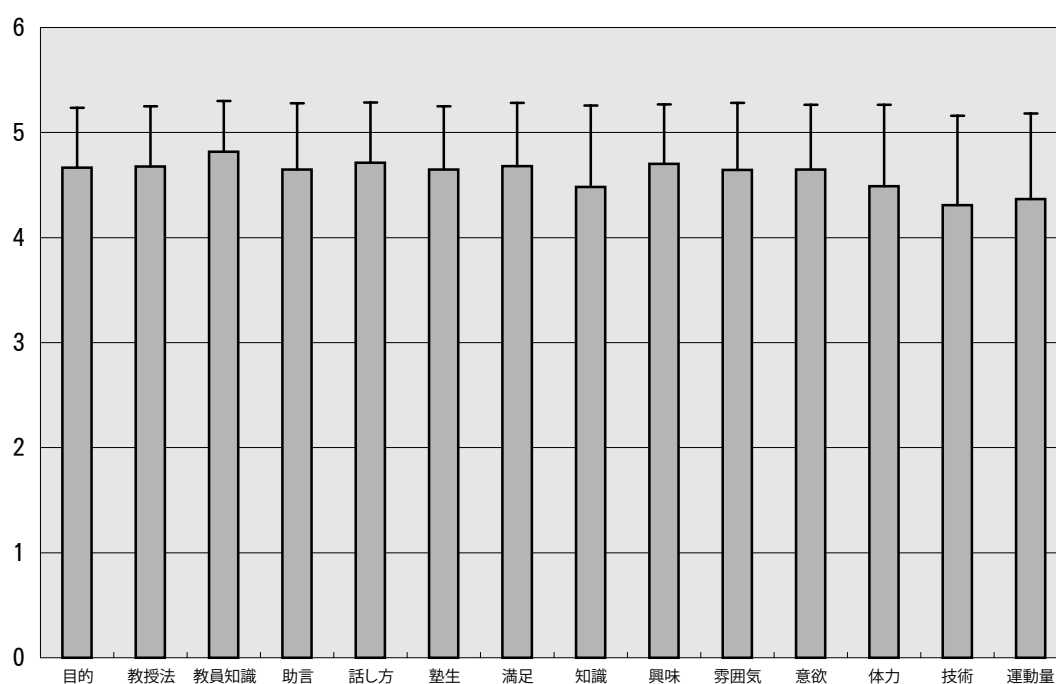
施設および機器・用具等について
よかったこと：

改善を要すること：

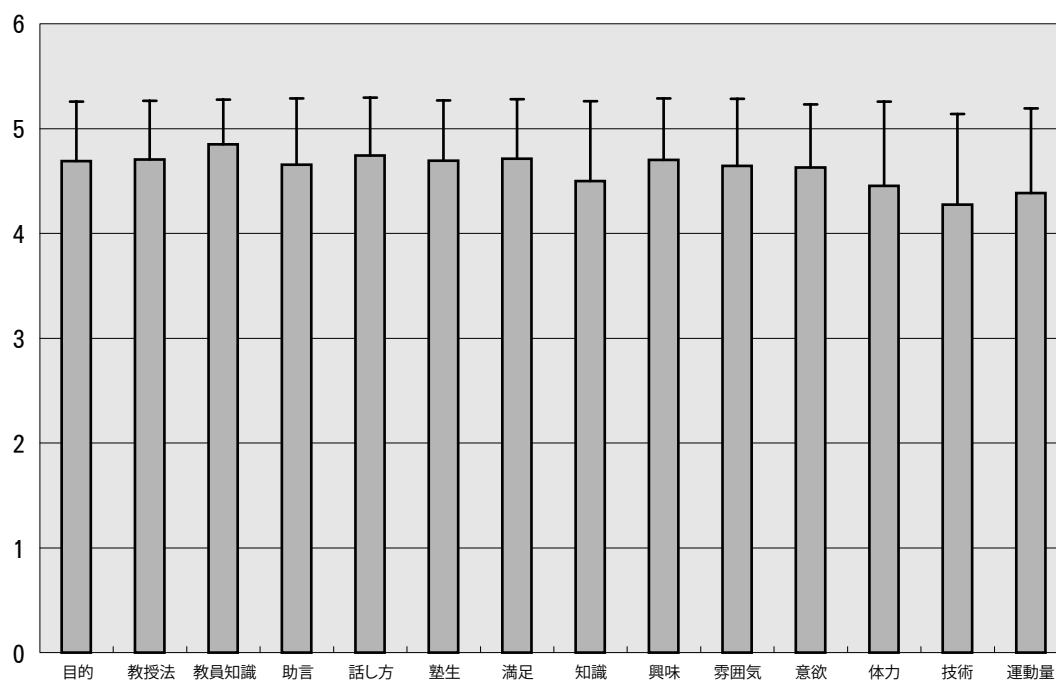
●自由記述 4

体育科目全般に関する意見および提案

ご協力ありがとうございました



図Ⅲ-1-3. 授業に関する質問項目別の5段階評価（春学期ウィークリー全体平均）



図Ⅲ-1-4. 授業に関する質問項目別の5段階評価（秋学期ウィークリー全体平均）

表Ⅲ-1-8. 種目別の5段階評価集計一覧（春学期ウィークリー）

種目名	人数		目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
バレーボール	280	平均	4.6	4.7	4.8	4.7	4.8	4.7	4.7	4.3	4.7	4.7	4.7	4.5	4.4	4.5
		標準偏差	0.6	0.6	0.5	0.6	0.4	0.5	0.6	0.9	0.5	0.6	0.6	0.7	0.9	0.7
バスケットボール	269	平均	4.8	4.7	4.9	4.7	4.7	4.7	4.8	4.5	4.8	4.8	4.8	4.8	4.6	4.6
		標準偏差	0.5	0.6	0.4	0.5	0.5	0.6	0.5	0.7	0.5	0.5	0.4	0.4	0.7	0.8
テニス	190	平均	4.6	4.6	4.8	4.5	4.6	4.6	4.6	4.6	4.7	4.6	4.6	4.4	4.4	4.3
		標準偏差	0.6	0.7	0.5	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.6	0.7	0.6	0.8	0.8	0.9
サッカー	236	平均	4.6	4.6	4.8	4.7	4.6	4.6	4.7	4.3	4.7	4.5	4.6	4.6	4.3	4.4
		標準偏差	0.5	0.5	0.5	0.6	0.7	0.6	0.6	0.9	0.5	0.7	0.6	0.6	0.9	0.8
バドミントン	176	平均	4.7	4.8	4.9	4.7	4.7	4.7	4.7	4.6	4.7	4.7	4.7	4.7	4.5	4.6
		標準偏差	0.5	0.5	0.4	0.6	0.5	0.6	0.5	0.7	0.5	0.6	0.6	0.6	0.7	0.7
エアロビクス	90	平均	4.9	4.9	4.9	4.8	4.9	4.9	4.9	4.6	4.8	4.9	4.8	4.8	4.3	4.6
		標準偏差	0.4	0.3	0.5	0.4	0.3	0.4	0.5	0.7	0.5	0.4	0.6	0.5	0.8	0.6
卓球	162	平均	4.5	4.4	4.5	4.5	4.6	4.4	4.5	4.2	4.5	4.4	4.5	4.0	4.0	4.2
		標準偏差	0.6	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	1.0	0.7	0.7	0.7	1.0	1.0	0.9
体力 UP コース	158	平均	4.8	4.7	4.8	4.4	4.7	4.5	4.6	4.4	4.5	4.2	4.4	4.6	4.1	4.2
		標準偏差	0.5	0.5	0.4	0.7	0.6	0.7	0.7	0.8	0.7	0.8	0.6	0.6	0.9	0.7
ソフトボール	37	平均	4.4	4.6	4.8	4.6	4.8	4.8	4.8	4.4	4.8	4.9	4.8	4.7	4.3	4.5
		標準偏差	0.9	0.6	0.5	0.6	0.4	0.4	0.4	0.8	0.4	0.4	0.6	0.6	0.8	0.8
ゴルフ	71	平均	4.6	4.5	4.7	4.4	4.7	4.5	4.6	4.7	4.7	4.5	4.6	4.0	4.3	4.2
		標準偏差	0.6	0.6	0.5	0.8	0.5	0.7	0.6	0.5	0.4	0.7	0.6	1.0	0.8	0.8
フライングディスク	37	平均	4.6	4.8	4.9	4.8	4.9	4.5	4.6	4.6	4.4	4.7	4.7	4.2	4.2	4.2
		標準偏差	0.8	0.4	0.3	0.5	0.3	0.7	0.7	0.7	0.8	0.5	0.5	1.0	1.0	1.0
フットサル	89	平均	4.7	4.8	4.8	4.8	4.7	4.7	4.8	4.6	4.8	4.8	4.6	4.7	4.6	4.4
		標準偏差	0.5	0.4	0.5	0.5	0.6	0.5	0.5	0.7	0.5	0.5	0.7	0.5	0.6	0.8
ダンス	82	平均	4.5	4.4	4.9	4.7	4.7	4.7	4.7	4.6	4.8	4.8	4.7	4.0	4.0	4.2
		標準偏差	0.8	0.7	0.4	0.7	0.6	0.6	0.7	0.8	0.4	0.5	0.6	0.9	1.0	0.9
ハンドボール	44	平均	4.7	4.8	4.8	4.8	4.9	4.8	4.7	4.7	4.8	4.8	4.8	4.8	4.6	4.5
		標準偏差	0.5	0.5	0.4	0.4	0.3	0.5	0.6	0.7	0.5	0.5	0.5	0.5	0.7	0.8
剣道	63	平均	4.8	4.8	5.0	4.9	4.9	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.7	4.6	4.5	4.4
		標準偏差	0.4	0.5	0.2	0.4	0.5	0.4	0.6	0.4	0.5	0.4	0.4	0.6	0.7	0.8
野球	19	平均	4.0	4.2	4.6	4.0	4.6	4.2	4.3	3.8	4.5	4.2	4.5	4.3	4.2	4.1
		標準偏差	0.7	0.6	0.5	0.7	0.6	0.6	0.8	0.6	0.5	0.8	0.6	0.7	0.8	0.9
ニューススポーツ	17	平均	4.6	4.6	4.8	4.7	4.9	4.4	4.6	4.4	4.6	4.6	4.5	3.9	3.6	4.0
		標準偏差	0.6	0.5	0.4	0.7	0.3	0.8	0.9	0.9	0.7	0.6	0.6	1.0	1.1	0.9
ウォーキングエクササイズ	44	平均	4.7	4.6	5.0	4.5	4.7	4.4	4.4	4.5	4.4	4.4	4.3	4.3	3.5	4.1
		標準偏差	0.5	0.6	0.2	0.6	0.6	0.7	0.7	0.7	0.8	0.8	0.9	0.8	1.0	0.8
柔道	44	平均	4.8	4.8	4.9	4.9	4.8	4.8	4.8	4.8	4.9	4.9	4.5	4.7	4.4	4.3
		標準偏差	0.5	0.4	0.6	0.4	0.5	0.4	0.6	0.4	0.4	0.3	1.0	0.6	0.8	0.9
合気道	42	平均	4.9	5.0	5.0	4.9	5.0	4.8	4.9	4.7	4.9	4.8	4.8	4.4	4.2	4.3
		標準偏差	0.3	0.2	0.3	0.3	0.2	0.4	0.4	0.5	0.4	0.4	0.4	0.7	0.7	0.7
軟式野球	19	平均	4.4	4.1	4.7	4.2	4.4	4.4	4.5	3.9	4.4	4.6	4.6	4.3	4.0	4.0
		標準偏差	0.7	0.8	0.7	0.8	0.7	0.8	0.7	1.0	0.7	0.7	0.7	0.9	1.0	0.9
トランポリン	17	平均	4.9	4.9	5.0	4.9	4.9	4.9	4.9	4.8	5.0	4.9	4.9	4.8	4.6	4.6
		標準偏差	0.2	0.2	0.0	0.2	0.2	0.2	0.2	0.6	0.0	0.2	0.2	0.5	0.6	0.6
自動車	33	平均	4.9	4.9	4.9	4.8	4.5	4.8	4.8	4.6	4.8	4.6	4.8	3.4	4.0	3.7
		標準偏差	0.3	0.2	0.4	0.5	0.6	0.4	0.5	0.6	0.5	0.7	0.4	0.9	0.9	1.1
ジョギング	8	平均	4.8	4.5	4.8	4.4	4.6	4.3	4.6	4.0	4.3	4.5	4.5	4.4	3.8	4.0
		標準偏差	0.5	0.5	0.5	0.7	0.5	0.7	0.5	1.1	0.7	0.5	0.5	0.5	1.0	0.8
アーチェリー	37	平均	4.5	4.6	4.8	4.6	4.5	4.5	4.6	4.4	4.6	4.4	4.5	3.5	3.8	3.8
		標準偏差	0.7	0.5	0.5	0.6	0.7	0.7	0.6	0.6	0.5	0.6	0.6	0.9	0.8	0.9
陸上競技	4	平均	4.3	4.5	5.0	4.3	4.3	4.0	4.3	3.8	4.8	4.8	4.5	3.8	4.3	4.3
		標準偏差	0.5	0.6	0.0	1.0	1.0	1.2	1.0	1.5	0.5	0.5	0.6	1.0	1.0	1.0
アメリカンタッチフットボール	19	平均	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.8	4.9	4.7	4.9	5.0	4.9	4.7	4.5	4.5
		標準偏差	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.3	0.5	0.2	0.0	0.3	0.5	0.8	0.8
フェンシング	18	平均	4.3	4.5	4.7	4.4	4.4	4.4	4.2	4.7	4.2	4.1	4.1	3.9	3.9	3.7
		標準偏差	0.8	0.6	1.0	0.7	0.8	0.8	0.8	0.5	1.1	1.0	1.0	0.9	0.8	0.9
ソフトテニス	9	平均	4.8	4.8	5.0	5.0	4.8	4.7	4.8	4.4	4.8	4.9	4.4	4.8	4.4	4.4
		標準偏差	0.4	0.4	0.0	0.0	0.4	0.5	0.4	0.7	0.4	0.3	0.7	0.4	0.5	0.7
弓術	29	平均	4.6	4.6	4.9	4.5	4.7	4.9	4.8	4.7	4.8	4.8	4.7	4.0	4.1	4.1
		標準偏差	0.6	0.6	0.3	0.8	0.7	0.4	0.5	0.6	0.5	0.5	0.6	1.0	1.0	0.9
水泳	46	平均	4.9	4.8	4.9	4.7	4.6	4.6	4.7	4.8	4.8	4.7	4.6	4.7	4.6	4.5
		標準偏差	0.3	0.4	0.4	0.6	0.7	0.6	0.6	0.5	0.5	0.6	0.6	0.5	0.6	0.8

表Ⅲ-1-9. 種目別の5段階評価集計一覧（秋学期ウィークリー）

種目名	人数		目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
バレーボール	204	平均	4.6	4.7	4.8	4.7	4.8	4.8	4.8	4.4	4.7	4.8	4.6	4.5	4.3	4.5
		標準偏差	0.7	0.6	0.5	0.6	0.4	0.5	0.5	0.8	0.5	0.5	0.6	0.7	0.8	0.7
バスケットボール	237	平均	4.8	4.7	4.8	4.7	4.7	4.7	4.7	4.5	4.8	4.7	4.7	4.7	4.5	4.6
		標準偏差	0.5	0.5	0.5	0.6	0.6	0.6	0.6	0.8	0.5	0.6	0.5	0.7	0.8	0.7
テニス	204	平均	4.7	4.7	4.9	4.6	4.7	4.7	4.6	4.6	4.7	4.6	4.7	4.5	4.5	4.4
		標準偏差	0.6	0.6	0.4	0.8	0.7	0.6	0.6	0.7	0.6	0.7	0.6	0.8	0.7	0.8
サッカー	177	平均	4.7	4.7	4.9	4.8	4.8	4.8	4.7	4.4	4.7	4.6	4.6	4.6	4.4	4.5
		標準偏差	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5	0.6	0.9	0.6	0.7	0.7	0.8	0.9	0.8
バドミントン	115	平均	4.7	4.7	4.9	4.7	4.7	4.7	4.7	4.5	4.7	4.7	4.7	4.6	4.4	4.5
		標準偏差	0.5	0.6	0.4	0.6	0.6	0.6	0.6	0.8	0.5	0.6	0.6	0.7	0.8	0.8
エアロビクス	107	平均	4.8	4.9	4.9	4.7	4.9	4.8	4.8	4.5	4.8	4.7	4.7	4.7	3.9	4.6
		標準偏差	0.5	0.5	0.3	0.6	0.4	0.5	0.4	0.8	0.5	0.5	0.5	0.5	0.9	0.6
卓球	110	平均	4.5	4.6	4.8	4.6	4.6	4.5	4.6	4.2	4.5	4.6	4.6	4.0	4.1	4.2
		標準偏差	0.6	0.6	0.5	0.6	0.7	0.7	0.6	0.9	0.7	0.6	0.6	0.9	0.8	0.8
体力UPコース	133	平均	4.8	4.7	4.8	4.5	4.8	4.5	4.6	4.5	4.5	4.1	4.4	4.6	3.9	4.2
		標準偏差	0.4	0.5	0.4	0.7	0.5	0.7	0.6	0.6	0.7	0.9	0.6	0.6	0.9	0.7
ソフトボール	87	平均	4.6	4.7	4.8	4.5	4.8	4.7	4.7	4.3	4.6	4.6	4.6	4.3	4.2	4.3
		標準偏差	0.8	0.6	0.5	0.7	0.5	0.5	0.6	1.0	0.7	0.7	0.7	1.0	1.0	0.9
ゴルフ	66	平均	4.7	4.6	4.8	4.4	4.8	4.7	4.7	4.6	4.8	4.5	4.6	4.1	4.5	4.4
		標準偏差	0.6	0.6	0.4	0.9	0.4	0.6	0.6	0.6	0.5	0.7	0.5	0.9	0.7	0.7
フライングディスク	27	平均	4.7	4.9	5.0	4.7	4.9	4.6	4.6	4.6	4.6	4.8	4.6	4.4	4.3	4.3
		標準偏差	0.6	0.4	0.0	0.5	0.3	0.5	0.7	0.6	0.6	0.4	0.6	0.7	0.8	0.7
フットサル	58	平均	4.8	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	4.7	4.6	4.7	4.6	4.7	4.8	4.5	4.5
		標準偏差	0.4	0.5	0.4	0.4	0.3	0.3	0.6	0.8	0.7	0.7	0.5	0.5	0.9	0.8
ダンス	68	平均	4.5	4.5	4.9	4.5	4.7	4.8	4.7	4.7	4.8	4.8	4.7	4.1	4.2	4.3
		標準偏差	0.7	0.8	0.4	0.9	0.8	0.5	0.6	0.6	0.7	0.7	0.6	1.1	0.8	1.0
ハンドボール	28	平均	4.5	4.8	4.8	4.8	4.9	4.8	4.8	4.4	4.9	4.9	4.7	4.7	4.5	4.6
		標準偏差	0.9	0.6	0.7	0.5	0.4	0.5	0.5	0.8	0.4	0.3	0.5	0.6	0.8	0.7
剣道	65	平均	5.0	5.0	4.9	4.9	4.9	4.9	4.8	4.7	4.8	5.0	4.7	4.6	4.5	4.4
		標準偏差	0.2	0.2	0.5	0.3	0.2	0.4	0.4	0.5	0.4	0.2	0.5	0.6	0.8	0.8
野球	20	平均	4.5	4.4	4.6	4.2	4.4	4.4	4.4	4.2	4.5	4.3	4.2	4.4	4.1	4.2
		標準偏差	0.6	0.7	0.5	0.8	0.7	0.7	0.6	0.8	0.7	1.0	0.8	0.7	0.9	0.8
ニュースポーツ	20	平均	4.5	4.7	4.6	4.6	4.8	4.5	4.7	4.4	4.4	4.6	4.6	3.5	3.7	3.8
		標準偏差	0.6	0.6	0.7	0.7	0.6	0.8	0.6	0.7	0.8	0.6	0.7	1.0	0.9	0.8
ウォーキングエクササイズ	31	平均	4.8	4.6	5.0	4.5	4.8	4.5	4.4	4.4	4.1	4.6	4.5	4.2	3.5	4.0
		標準偏差	0.4	0.6	0.2	0.6	0.4	0.6	0.6	0.7	0.8	0.6	0.5	0.9	1.0	0.7
柔道	30	平均	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	4.8	4.8	4.8	4.8	4.7	4.6	4.4	4.1	4.3
		標準偏差	0.3	0.3	0.2	0.3	0.3	0.5	0.5	0.5	0.6	0.7	0.7	0.9	1.0	0.8
合気道	38	平均	4.9	5.0	5.0	4.9	5.0	4.8	4.9	4.7	4.9	4.8	4.8	4.4	4.2	4.3
		標準偏差	0.3	0.2	0.3	0.3	0.2	0.4	0.4	0.5	0.4	0.4	0.4	0.7	0.7	0.7
軟式野球	21	平均	4.7	4.7	4.8	4.7	4.8	4.8	4.8	4.6	4.8	4.9	4.8	4.2	4.2	4.2
		標準偏差	0.7	0.6	0.5	0.7	0.5	0.4	0.4	0.6	0.5	0.4	0.4	0.8	0.8	0.7
トランポリン	16	平均	4.9	5.0	5.0	5.0	4.9	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.9	4.9	4.9	4.8
		標準偏差	0.3	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	0.3	0.4
自動車	25	平均	4.6	4.7	4.9	4.4	4.5	4.5	4.6	4.7	4.8	4.1	4.5	2.9	3.6	3.2
		標準偏差	0.6	0.5	0.3	0.8	0.8	0.7	0.8	0.5	0.4	0.9	0.7	1.1	1.1	1.2
ジョギング	19	平均	4.8	4.6	4.8	4.6	4.6	4.5	4.5	4.2	4.4	4.7	4.7	4.6	4.2	4.3
		標準偏差	0.4	0.6	0.4	0.6	0.7	1.0	0.8	0.8	0.8	0.5	0.5	0.5	0.9	0.9
アーチェリー	28	平均	4.6	4.6	4.9	4.6	4.8	4.6	4.6	4.2	4.7	4.5	4.3	3.7	3.8	3.9
		標準偏差	0.5	0.6	0.4	0.5	0.5	0.5	0.6	0.8	0.5	0.6	0.7	1.0	0.9	0.8
陸上競技	6	平均	4.5	4.7	5.0	4.7	4.3	3.8	4.7	4.3	4.5	4.7	4.2	3.8	3.8	4.0
		標準偏差	0.5	0.5	0.0	0.5	0.8	1.0	0.5	0.5	0.5	0.5	0.8	1.0	0.8	0.9
アメリカンタッチフットボール	16	平均	4.8	4.9	5.0	4.9	4.9	4.6	4.9	4.7	4.9	4.8	4.8	4.4	4.5	4.6
		標準偏差	0.4	0.3	0.0	0.3	0.3	0.6	0.3	0.5	0.3	0.4	0.4	0.6	0.6	0.5
フェンシング	12	平均	4.7	4.4	4.9	4.5	4.4	4.3	4.6	4.7	4.4	4.5	4.5	4.6	4.5	4.1
		標準偏差	0.5	0.7	0.3	0.7	0.8	0.8	0.7	0.5	0.8	0.8	0.7	0.7	0.8	1.0
ソフトテニス	7	平均	4.6	4.6	5.0	4.6	4.6	4.4	4.7	4.4	4.6	4.9	4.4	4.7	4.4	4.4
		標準偏差	0.5	0.5	0.0	0.5	0.5	0.8	0.5	0.8	0.8	0.4	0.8	0.5	0.5	0.8
弓術	21	平均	4.4	4.4	5.0	4.3	4.7	4.8	4.9	4.8	4.9	4.8	4.8	4.2	4.2	4.5
		標準偏差	0.7	0.7	0.2	0.8	0.6	0.5	0.4	0.4	0.3	0.4	0.5	0.8	0.8	0.7
水泳	35	平均	4.8	4.9	5.0	4.8	4.4	4.7	4.9	4.8	4.9	4.6	4.5	4.8	4.5	4.5
		標準偏差	0.5	0.3	0.2	0.5	0.6	0.5	0.4	0.5	0.3	0.6	0.8	0.4	0.6	0.7
ボクシング	14	平均	5.0	4.8	4.9	4.9	4.8	4.8	4.6	4.8	4.9	4.9	4.3	4.5	4.6	4.6
		標準偏差	0.0	0.6	0.3	0.4	0.8	0.6	0.8	0.6	0.4	0.3	1.2	0.9	0.5	0.7

2) シーズンスポーツ種目の授業評価

シーズンスポーツ種目における各項目の全体の平均値と標準偏差を図Ⅲ-1-5に示す。ウィークリー種目同様に、すべての項目とも平均値で4点をこえる肯定的評価が得られている。特に、「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」「授業は満足できるものであった」など5点に近い評価が得られており、ウィークリー種目よりも全般に評価が高いようである。例年、「運動量は適切であった」「この授業によって運動技術が向上した」「この授業は健康や体力の向上に役立った」の項目が比較的低くなるが、今年度は「この授業は健康や体力の向上に役立った」で4.6点と向上が見られ、他の2項目も平均点では向上が見られた。

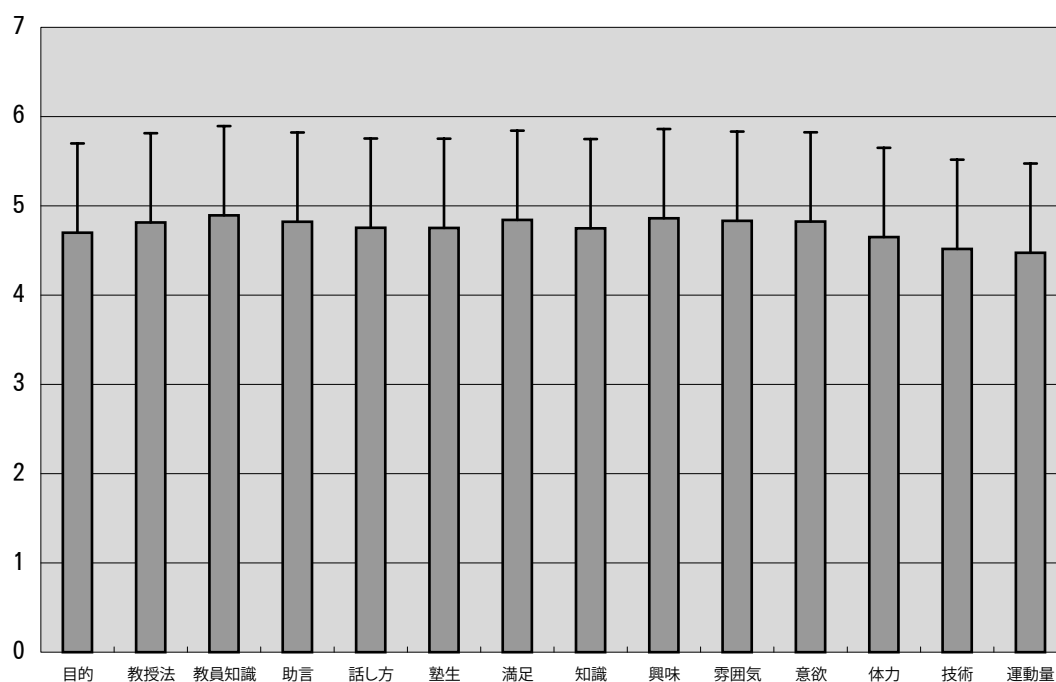
3) 講義・演習科目の授業評価

講義・演習科目の授業評価について春学期、秋学期別に集計した結果を図Ⅲ-1-6、7に示す。学期間で若干の違いはあるものの、全体として「このクラスの雰囲気は良好であった」

「教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した」「自分はこの授業に意欲的に取り組んだ」の項目が3点台の低い評価となっている。また、「教員の指導・教授法は適切であった」も昨年より低い評価で、4点程度となっている。講義・演習科目は総じて履修者が少なめであり、より双方向性のある授業が展開しやすいはずであるが、クラスの雰囲気や助言、教授の工夫などで十分な評価が得られていないことは改善を要する点である。「教員の知識」や「興味ある授業」としては高い評価を得ていることから、クラス運営上の工夫にもっと目を向ける必要があるであろう。

4) Web によるアンケート回収の試み

この授業アンケートは、授業最終週およびその1週前の授業終了前15分間程度を当て、教員が指示をした後退出し、学生が配布・回収を行う形式を基本としている（シーズンスポーツは現地の最終日などに実施）。これは、教員が現場を離れることで、学生の率直な意見を記入させることに配慮したものである。



図Ⅲ-1-5. 授業に関する質問項目別の5段階評価（シーズンスポーツ全体平均）

表Ⅲ-1-10. 種目別の5段階評価集計一覧（シーズンスポーツ）

種目名	人数		目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
空手	22	平均	4.9	4.9	5.0	5.0	4.8	4.6	4.8	4.7	4.8	4.7	4.8	4.9	4.8	4.7
		標準偏差	0.4	0.5	0.0	0.2	0.5	0.6	0.4	0.6	0.4	0.6	0.4	0.4	0.4	0.5
弓術	32	平均	4.9	4.9	4.9	4.9	4.8	4.8	4.9	4.8	4.9	4.8	4.9	4.5	4.3	4.3
		標準偏差	0.3	0.2	0.2	0.3	0.4	0.5	0.3	0.4	0.2	0.4	0.3	0.9	0.7	0.9
水泳（オープンウォータースイミング）	9	平均	4.9	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.9	5.0	5.0	4.9	4.9	4.9	4.6
		標準偏差	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.3	0.3	0.3	0.9
山岳	12	平均	4.6	4.8	5.0	4.8	5.0	4.8	4.8	4.8	5.0	4.9	4.8	4.8	4.2	4.4
		標準偏差	0.7	0.4	0.0	0.4	0.0	0.4	0.4	0.5	0.0	0.3	0.4	0.5	0.9	0.9
馬術	27	平均	4.8	4.7	4.8	4.8	4.7	4.9	4.8	4.8	4.9	4.8	4.8	4.3	4.4	4.2
		標準偏差	0.4	0.5	0.6	0.5	0.6	0.4	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	0.9	0.7	1.0
ヨット	32	平均	4.5	4.7	4.8	4.6	4.6	4.7	4.7	4.8	4.7	4.7	4.7	4.5	4.4	4.2
		標準偏差	0.6	0.6	0.5	0.7	0.7	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5	0.7	0.9	0.9
器械体操	19	平均	5.0	5.0	5.0	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	4.8	4.7	4.8
		標準偏差	0.0	0.0	0.0	0.2	0.2	0.5	0.2	0.3	0.5	0.3	0.3	0.4	0.6	0.4
端艇	4	平均	4.8	4.8	5.0	4.8	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.5
		標準偏差	0.5	0.5	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0
バレーボール	14	平均	4.6	4.7	4.9	4.9	4.9	4.9	5.0	4.7	5.0	4.9	4.9	4.9	4.7	4.9
		標準偏差	0.5	0.6	0.4	0.4	0.4	0.3	0.0	0.6	0.0	0.4	0.4	0.4	0.5	0.4
アウトドアレクリエーション	34	平均	4.7	4.8	4.9	4.9	4.8	4.7	4.8	4.8	4.8	4.9	4.8	4.6	4.1	4.4
		標準偏差	0.5	0.4	0.2	0.4	0.4	0.7	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.6	0.8	0.7
スキー	39	平均	4.6	4.9	4.9	4.7	4.5	4.5	4.9	4.8	4.8	4.9	4.8	4.8	4.8	4.5
		標準偏差	0.6	0.3	0.3	0.5	0.8	0.9	0.3	0.4	0.5	0.4	0.4	0.5	0.5	0.8
スケート	30	平均	4.5	4.7	4.9	4.8	4.8	4.8	4.8	4.4	4.9	4.9	4.9	4.6	4.6	4.6
		標準偏差	0.8	0.5	0.3	0.5	0.5	0.4	0.4	0.9	0.3	0.3	0.3	0.6	0.7	0.7

しかし、授業時間を割くことや最後の授業のまとめの後、教員が現場を離れる点などはマイナスの要素であり、必ずしも最善の方法とは言いきれない。そこで、こうした点の打開策として Web を利用したアンケート回収方法がある。そこで、平成18年度秋学期においては、教育委員会の教員（石手靖、松田雅之、村山光義、加藤幸司）のみのクラスで Web を利用したアンケート回収についてテストケースの実施を試みた（結果には紙面と Web 実施両方が含まれている）。実際には Web 上のシステム作成が遅れ、学生への告知が遅くなってしまったが、学生が自由な時間で日吉のネットワークにアクセスする方式が可能となった。しかしながら、期末試験期間に重なってしまった影響もあり、回収率が極端に低い結果となってしまった。Web からの回答では、実施は学生の善意に任され、無記名ゆえに強制力が弱まり回収率が下がることは予想された。この点に配慮し、告知時期を早めると共に実施をより促す方法を今後再検討する必要がある。また、紙面との併

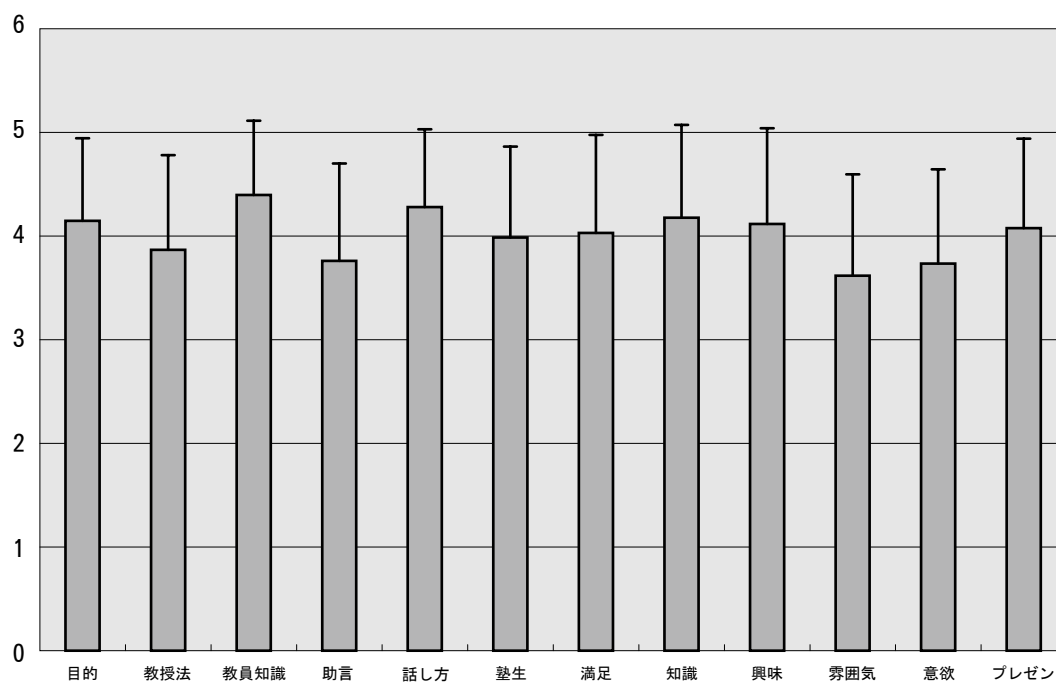
用も1つの手段となる。委員会ではこれらの事柄を踏まえ、次年度に再度 Web 利用のアンケート回収をテストする予定である。

3. 未履修者アンケートの実施

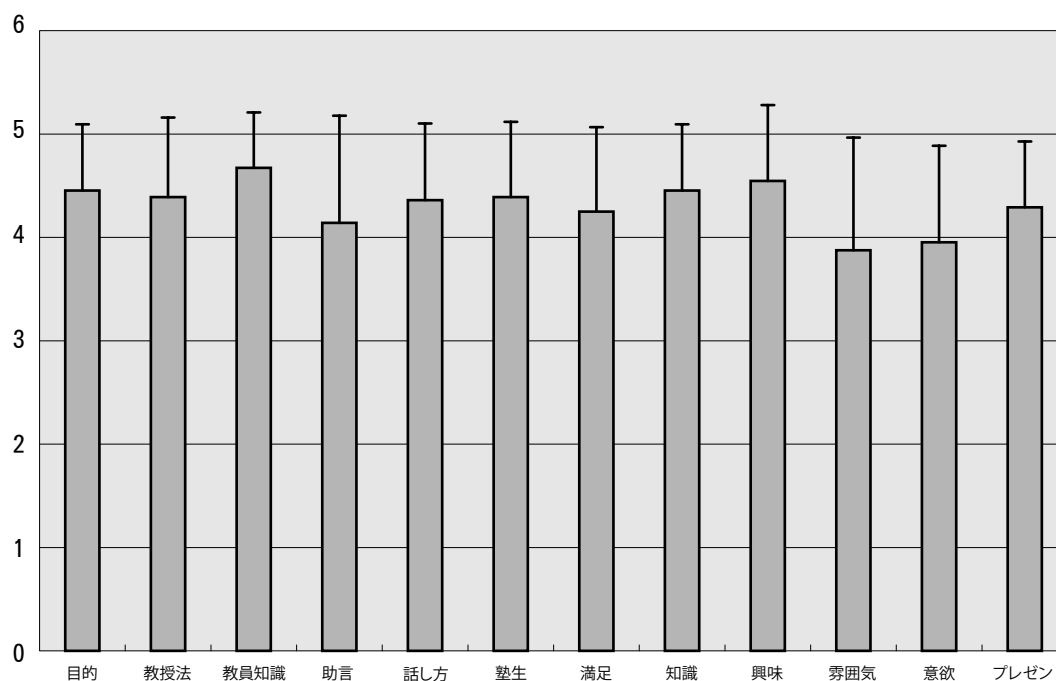
平成5年度より保健体育科目の選択化がなされ、体育研究所ではより効果的な体育教育カリキュラムの構築を念頭に、毎年カリキュラムの構成に努力を続けてきた。しかしながら、在学中に体育科目を履修せずに卒業する学生も存在する。特に近年、その割合が漸増傾向にある。そこで、体育実技の未履修者を対象にアンケートと調査を実施した。

実際の調査は、秋学期末（1月）に準備を進め、2月上旬に発送し、3月下旬までに返送してもらうようにした。文・経済・法・商・医・理工学部で、2670名に発送し、回収は690名分、回収率は25.8%であった。

平成19年4月現在、アンケート結果は集計中であり、詳細は研究所紀要への投稿や、次年度の活動報告書に報告する予定である。



図Ⅲ-1-6. 授業に関する質問項目別の5段階評価（春学期講義・演習の全体平均）



図Ⅲ-1-7. 授業に関する質問項目別の5段階評価（秋学期講義・演習の全体平均）

4. 通信教育部対象の科目

1) 体育理論

通信教育課程の体育理論は平成18年度よりテキスト科目を「新・体育理論」とし、単位数も2単位に変更した。これに合わせ、テキストを改訂した（体育研究所編集、分担執筆、佐々木玲子、吉田泰将、村山光義、村松憲）。レポート並びに試験問題の出題・採点を佐々木玲子、吉田泰将、村山光義の3名が担当した。また、夏期スクーリング（平成18年8月1日（火）から8月8日（火）の日曜

を除く7日間）においても保健体育科目として体育理論・保健衛生をオムニバス形式で実施した。スクーリングでの各教員のテーマを表Ⅲ-1-11に示す。

2) 体育実技

夏期・冬期スクーリングにおいて体育実技を開講した。夏期は、平成18年8月1日（火）から8月8日（火）の日曜を除く7日間、12種目を日吉キャンパスにて午前中の2時間実施した。また、冬期は平成19年2月9日（金）から2月12日（月）までの3泊4日でスキー

表Ⅲ-1-11. 平成18年度通信教育部講義開講科目および担当者一覧

	担 当 者	テ ー マ
保 健 衛 生	斎 藤 郁 夫	高血圧
	河 邊 博 史	糖尿病
	和井内 由充子	虚血性心疾患
	辻 岡 三南子	医学とスポーツ
	徳 村 光 昭	子どもの生活習慣
	南 里 清一郎	エイズ
体 育 理 論	佐々木 玲 子	人の成長と加齢に伴う身体機能の変化
	村 山 光 義	スポーツと人間の関係及びその教育的意義
	吉 田 泰 将	体力トレーニングの理論と実際

表Ⅲ-1-12. 平成18年度通信教育部体育実技スクーリング開講種目および担当者一覧

	種 目 名	担当者	定 員	履修者数	充足率
夏 期	剣道	吉田 泰将	20	6	30.0%
	柔道	安藤 勝英	20	3	15.0%
	ウォーキングエクササイズ	谷口こゆき	30	29	96.7%
	卓球	松田 雅之	30	29	96.7%
	バスケットボール	加藤 大仁	25	11	44.0%
	バレーボール	村山 光義	30	14	46.7%
	エアロビクス	佐々木玲子	20	18	90.0%
	体力アップコース	山内 賢	20	18	90.0%
	フットサル	須田 芳正	25	18	72.0%
	バドミントン	加藤 幸司	40	33	82.5%
	ソフトボール	綿田 博人	25	18	72.0%
	ゴルフ	勝又 正浩	20	20	100.0%
冬期	スキー	水野 英夫	70	41	58.6%
	合計		375	258	68.8%

を戸狩温泉スキー場で実施した。各担当者及び履修者数を表Ⅲ-1-12に示す。

5. 他学部および塾内における授業協力

日吉・三田において開講される体育研究所設置の体育科目および通信教育部のテキスト科目・スクーリング科目に加え、各学部・セ

ンターの設置科目や一貫教育校の授業についても研究所所員が協力をしている。平成18年度の協力科目および担当者を表Ⅲ-1-13に示す。今後もこうした塾内における共同参画型の授業を発展させたいと考える。

表Ⅲ-1-13. 塾内における授業担当および協力

授 業 科 目 名	担 当 者	開講学部など	曜日時限など
アカデミックスキルズⅠ・Ⅱ	村山光義	教養研究センター 設置科目	金曜 5 時限
体育Ⅱ・Ⅲ	加藤幸司	総合政策学部 環境情報学部	水曜 2、3 時限
体育Ⅰ、体育Ⅱ・Ⅲ	牛山潤一	総合政策学部 環境情報学部	金曜 1、2、3 時限
人体の科学	佐々木玲子、村山光義	理工学部	秋学期水曜 5 時限
課外授業	野口和行	高等学校	7 月 11 日 ～ 14 日
特別授業（サッカー）	須田芳正	幼稚舎 （6年生男子）	11月30日

Ⅲ-2 スポーツイベントの開催

1. 塾長杯・塾内競技大会

1) 塾長杯フットサル大会

1. 開催日：平成18年7月1日（土）
2. 会 場：日吉記念館
3. 開催時間：11:00～19:00
4. 参加チーム数：32チーム
5. 参加者数：約370名（登録選手数270名、観客約100名）
6. ゲーム数：55ゲーム（1ゲーム15分間）
予選リーグ48試合／決勝トーナメント7試合
7. 協 力：体育会サッカー部／放送研究会(K-Sound)／チア&ソングリーダーズユニコーンズ／大塚製薬（株）
8. 参加チーム抽選会：平成18年6月23日（金） 16:30～18:00 90番教室
9. 応募チーム数：72チーム
10. 結 果
優勝：あ☆ラッキー
2位：Gazza FC
3位：Public Voice
てんぐ

11. コメント：今年も各キャンパスや教職員チームからのエントリーも含め72チームから抽選で32チームが参加した。予選リーグとして4チームずつのブロックを8つ作り、各リーグ1位の合計8チームが決勝トーナメントに進出した。予選リーグから白熱した試合が続いたが、ベスト4のうち3チームはシードチームという波乱の少ない大会となった。

大会の運営に当たっては、体育会サッカー部が事前の準備から当日の運営までを取り仕切り、ユニコーンズによるソングリーディング、放送研究会によるアナウンスなどが大会を盛り上げてくれた。また、塾長杯に参加したOBが観戦に来るなど、塾長杯の歴史を感じさせてくれる一面も見られた。



2) 塾長杯バレーボール大会

1. 開催日：平成18年10月1日（日）
2. 会 場：日吉記念館
3. 開催時間：10:00～19:00
4. 参加チーム数：31チーム（チャンピオンズリーグ15、エンジョイリーグ16）
5. 参加者数：約350名（登録選手数チャンピオンズリーグ104名、エンジョイリーグ122名、観客数約120名）
6. ゲーム数：53ゲーム
予選リーグ45試合／決勝トーナメント8試合
7. 協 力：大会実行学生スタッフ／ヒヨシエイジ／放送研究会（K-Sound）／チア&ソングリーダーズユニコーンズ／大塚製薬（株）
8. 参加チーム抽選会：平成18年9月28日（木） 18:00～ J414番教室
9. 応募チーム数：30チーム
10. 結 果

【チャンピオンズリーグ】

- 優勝：浦和スケルトンズ
2位：中国選抜
3位：闘病生活
4位：KVF2年

【エンジョイリーグ】

- 優勝：アイアム
2位：リスペクト
3位：デカブタC
ぬかちんを偲ぶ会

11. コメント：バレーボールサークルのメンバーが中心となったチャンピオンズリーグは、4チームの4ブロック（1ブロック3チーム）に分かれてリーグ戦を行い、各ブロックの1位チームによる決勝トーナメントを行った。同様にエンジョイリーグでも、4チームの4ブロックに分かれて総当たり戦を行い、各ブロックの1位チームによる決勝トーナメントを行った。チャンピオンズリーグ、エンジョイリーグともに白熱したゲームが続き、恒例のユニコーンズによるソングリーディング、放送研究会によるアナウンスも大会を大いに盛り上げてくれた。

今年は新たな試みとして、地域住民、慶應義塾大学、学生が一体となって、日吉の町の地域活性化を図るヒヨシエイジの協力を得て、地域のサークルによるソーラン節のパフォーマンスが行われた。このような他団体や地域との交流も含めた塾長杯のあり方を考えていきたい。



3) 塾長杯バスケットボール大会

1. 開催日：平成18年12月9日（土）
2. 会 場：日吉記念館
3. 開催時間：9:00～19:00
4. 参加チーム数：28チーム（メインリーグ16、エンジョイリーグ12）
5. 参加者数：約300名（登録選手数メインリーグ144名、エンジョイリーグ91名、観客数約65名）
6. ゲーム数：56ゲーム（予選：メインリーグ24試合、エンジョイリーグ18試合 / 決勝トーナメント：メインリーグ・エンジョイリーグとも7試合）
7. 参加チーム抽選会：平成18年11月28日（火）18:00～19:30 J411教室
8. 応募チーム数：52チーム
9. 結 果

【メインリーグ】

優勝：L1（エルワン）

2位：リコタイパイパンズ

【エンジョイリーグ】

優勝：KAGERS（ケイジャーズ）

2位：ドエル

10. コメント：昨年までは、湘南藤沢キャンパス（SFC）とのスポーツ交流という意味で会場をSFCに於いて本大会を運営していたが、前年大会参加のチームより交通の便が悪いとの反省点もあり、会場を日吉記念館で行うことになった。SFCへの参加チーム呼びかけは、ポスターとSFC体育教員からの告知による情報提供により積極的に行った。その結果SFCからの参加応募は13チーム（内看護医療学部が2チーム）、5チーム本大

会参加（内看護医療学部2チーム）といった成果も得られた。今回の大会運営の成功の特徴は、年度初からの学生による企画・運営スタッフを組織したことと、外部の大学（日本体育大学バスケットボール部）に有資格者の審判を依頼したことにある。結果、ゲーム進行の采配に関する不満やクレームはまったく無く、にぎやかで活気のある大会となった。エンジョイリーグの優勝チームはSFCからの参加チームであったこと。これもまた、来年の大会にSFCチームが多く参加してもらえる要因となると思われる。放送にはKーサウンド、昼休みのエキジビションにはユニコーンズのチア・リーディングの演技といった企画も会場を華やかに飾れた要素でもある。ただ、悪い反省として2点挙げられる。1）授業用のボールを練習用のレンタルとして大学から借用したが、そのボールが3個なくなったこと。2）記念館前にタバコの吸殻が散乱していたこと。これらは、学生のマナー教育として今後の踏み台としていきたい。このように、学生による自治が大きく目立った大会として、来年の大会成功をも祈りたいと感じた。



4) 塾内卓球大会

1. 開催日：平成18年10月28日（土）
2. 会 場：日吉卓球場（日吉記念館横体育館 内）
3. 開催時間：8:50～15:00
4. 参加者数：延べ32名（最強卓球シングルス10名、最強卓球ダブルス4ペア、温泉ピンポンシングルス6名、温泉ピンポンダブルス4ペア）
5. ゲーム形式：11点先取3セットマッチ
6. 結 果

【最強卓球シングルス】

優勝：駒田武大

2位：門鉄平

3位：川崎宏海

4位：横山暁

【最強卓球ダブルス】

優勝：川崎宏海&門鉄平ペア

2位：岡部俊一郎&大坪由和ペア

3位：横井俊孝&袁博 雅

【温泉ピンポンシングルス】

優勝：竹内将人

2位：中澤直紀

3位：本間郁朗

【温泉ピンポンダブルス】

優勝：柳楽健&上河内雄基ペア

2位：長田信夫&本間郁朗ペア

3位：竹内将人&石川雅之ペア

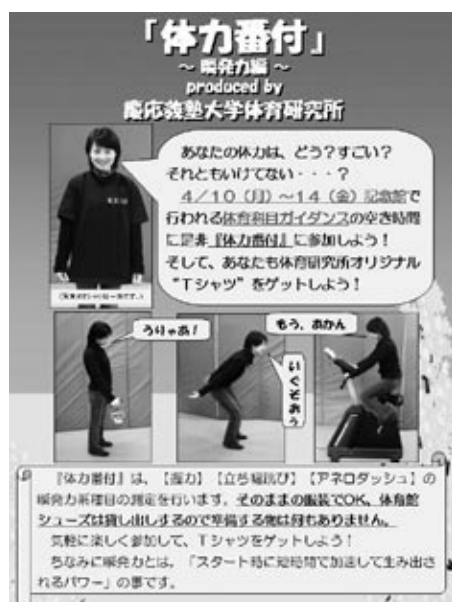
7. コメント：今回で第4回目となったこの大会には、天候に恵まれた秋空が心地よい日に開催された。参加者は、学生、大学院生、教職員のほか、ホームページを見て応募した塾員であった。前回大会と比べ少し参加人数が少なかったが、この大会が始まってから欠かさずに参加してくれる参加者に、改めてこの大会が支えられていると感じさせられる大会となった。大会は、総当たりとなるリーグ戦方式を行い順位決定した。最強卓球シングルスのみ2ブロック制によりリーグ戦を行い、その結果上位2名計4名による決勝トーナメント戦を行い、順位を決定した。



2. 体育科目ガイダンス期間中のイベント

1) 『体力番付』(簡易体力測定)

1. 期 間：平成18年4月10日(月)～14日(金)
2. 時 間：①前半ガイダンス終了時(全クラス)～次回開始まで
②後半ガイダンス終了時(全クラス)～次時限開始まで
(4時限はなし)
3. 場 所：日吉記念館フロアの一部
4. 測定種目：アネロダッシュ・立ち幅跳び・握力 計3種目
5. 参加人数：190名(男子167名、女子29名)



3. 公開講座(他)

2) 健康ジョギング教室

1. 期 間：平成18年10月23日(月)～11月13日(金) 計6回
(10/23月、27金、30月、11/6月、10金、13月)
2. 時 間：18:00～19:30
3. 会 場：日吉陸上競技場及び体育研究所1階トレーニングルーム

4. 講 師：松田雅之(体育研究所准教授)
：瀬古利彦(S&B食品㈱陸上競技部監督、11/13のみ)
5. 補助員(ペースメーカー)：山内賢、野口和行、西村忍(体育研究所)
6. 参加者：27名(男性10名、女性17名)
7. 受講料：5,000円(教職員¥2,500)
8. コメント：今回は教職員を中心に27名の参加があった。リピーターの方が多く、和やかな雰囲気の中で講座を進めることができた。

全日程を通して、ウォーキングやジョギングの効果的な実践方法を解説しながら、約50分間のジョギングやウォーキングを実施した。ジョギング実施に際しては、血圧、心拍数、歩数等の測定を行いながら、個々人に適した運動量を指示し、ペース別のグループに分かれて行った。また、トレーニングルームで簡単なウェイトトレーニングやエアロバイク等を使った健康・体力づくりの方法も取り入れた。最終日には、特別講師として瀬古利彦氏(SB食品陸上競技部監督)を招き、日吉陸上競技場を一緒に走り、その後体育研究所教員室にて楽しいジョギングのすすめについて懇談を行った。



4) 第21回「スキーとスノーボードのつどい」への講師派遣

1. 主 催：慶應義塾大学学生総合センター「大学生生活懇談会」
2. 期 間：平成19年2月6日(月)～9日(木)
3. 場 所：新潟県赤倉観光リゾートスキー場
4. 宿 舎：慶應義塾赤倉山荘
5. 引率教職員：伊東裕司(文学部)、石手靖・牛山潤一(体育研究所)、新井佑介(平16卒)・山崎健二(学生総合センター)
6. 参加者数：33名(男子9名、女子4名)
7. コメント：6日午前8時30分、定刻通りバスは目的地を目指して三田キャンパスを出発した。参加者の顔ぶれを見ると、参加33名中4名が昨年に引き続きの参加であり、しかも、内1名は韓国からの訪問研究員の方であった(今回は更にもう1名訪問研究員の方が参加した)。塾内イベントとはいえ、塾生たちにとっては貴重な異文化交流の時間であったように思う。

スノーボードの導入とともにスキーのインストラクターが1名減ったこともあり、初級者から上級者までかなり幅広いレベルの学生たちを網羅しなければいけない状況であったが、伊東先生や赤倉山荘の望月さんのサポートを受け、問題なく講習は展開された。夕食後には、毎夜懇親会が催された(山崎さんの当初のご指示ではこの初日の懇親会のみが「全員参加が義務」であったが…結局3夜ともにほぼ全ての学生が参加した)。昨年の「スキーの集い」では、参加者が少なかった上、物静かな学生が多かったため、教職員が率先して盛り上げ役を担うという場面がしばしば見られたが、今回のツアーは参加者数が増えただけでなく、元気の有り余った学生が多々参加してようで、「スキー・スノーボードを通じての教職員－学生間の交流が目的」という本ツアーのコンセプト通り、実に盛り上が

りのある楽しい会が展開された。

最終日、午前は完全な自由時間としてそれぞれがゲレンデに出た。ゲレンデにいた時間こそ短かったが、このツアーで仲良くなった者同士で自由に滑ったり、ときには上級者による裏講習が展開されたりと、講習の枠を離れて皆が最後の滑走を満喫していた。

今回は、冒頭にも述べたとおり、スノーボードの講習を取り入れた初めてのツアーであったわけだが、若くしてスノーボードの指導員の資格を有されている新井氏のご指導は実にロジカルかつ丁寧なものであり、スノーボードの導入は大成功であったといって間違いはない。また赤倉山荘を利用したおかげで、宿泊費が1万円安くなった上、4日間のフリーパスリフト券で6500円という、通常では考えられない安価で4日間を過ごすことが出来た。施設の綺麗さ、貸切りであったこと、食事の味の良さ、望月さんのお人柄など、アンケート結果を見ても、赤倉山荘を利用したこともツアーの大成功の一要因であったことは明らかである。

今回のツアーは気候にも恵まれ、学生達が所属や学年の枠を超えて交流を図る機会として非常に有意義なものであったと思う。特定の人間との付き合いに隔たりがちな昨今の学生にとって、このような機会は心豊かな社会人になるためのステップとして非常に良い経験であったのではないだろうか。



4. 所内施設の開放

1) トレーニングルーム（1階）の開放

1. 期 間：平成18年5月8日（月）～7月14日（金）、9月25日（月）～12月22日（金）、平成18年1月9日（火）～22日（月）
2. 曜日時間：月～金 16:00～18:00
3. 利用者数：952名
（春学期501名、秋学期451名）
4. コンディショニングトレーナー担当者
月：山内賢
火：清王（学生トレーナー）
水：野口和行
木：牛山潤一
金：西村忍

5. コメント：慶應義塾創立150年記念事業による複合施設建設工事に伴い、トレーニングルームは体育館西側の仮設棟に移動となった。初年度ということもあり、トレーニングルームの開放は16:00から18:00までの2時間とした。最初は、仮設棟にトレーニングルームがあることが認知されず、利用者も例年に比べて小数であったが、体育会の部室が近いこともあり、体育会部員の利用が増えたように思われる。

その一方、以前は体育研究所から離れた場所にあったフリーウェイトルームも仮設棟に移動となり、トレーニングルームの機能としては以前より充実したものとなった。



IV. 業務活動記録

IV. 業務活動記録

平成18年度総務分野関係報告

1 人事（専任所員）

定年退職

高嶺隆二君（教授）

（3月31日付）

2 塾内役職

- (1) 大学寄宿舍舎監 近藤明彦君
- (2) 大学教養研究センター副所長
近藤明彦君（～9月30日）
- (3) 大学教養研究センター所員
近藤明彦君、松田雅之君、石手 靖君、
村山光義君、吉田泰将君、加藤大仁君、
野口和行君、村松 憲君
- (4) 大学学生総合センター副部長（日吉支部）
石手 靖君
- (5) 日吉キャンパス公開講座運営委員会委員
近藤明彦君、松田雅之君
- (6) 日吉キャンパスカレンダー編集委員長
野口和行君
- (7) 極東証券寄附講座運営委員
吉田泰将君
- (8) 日吉行事企画委員会（HAPP）委員
石手 靖君
- (9) 記念館運営連絡協議会委員
植田史生君、野口和行君

3 研究所内役職の主なもの

- (1) 所 長
植田史生君
- (2) 学習指導主任
石手 靖君
- (3) 学習指導副主任
松田雅之君、村山光義君
- (4) 総務委員会委員長
吉田泰将君
- (5) 教育委員会委員長
石手 靖君

- (6) 研究委員会委員長

村松 憲君

- (7) スポーツ振興委員会委員長

野口和行君

- (8) 将来構想委員会委員長

綿田博人君

4 代替施設の稼動と体育研究所新施設の建設計画について

慶應義塾創立 150 年記念事業による複合施設建設工事に伴い、4 月から旧棟の取り壊しが始まった。体育研究所（研究室、実験室等）は前年度末に藤山記念館 2 階の代替施設に移転し、他の施設（トレーニングルーム・教員更衣室用の仮設棟、エクササイズスタジオ用の記念館北側控室）も含めて2006年度の代替施設の稼動は概ね順調であったといつてよい。また、水泳の授業は民間施設を借り上げることで1年間賄うことができたが、2007年度については休講とせざるを得なかった。

新施設の設計案については、設計監理業者との打合せを重ね、基本的に合意に達することができた。経過概要は次のとおり。

- | | |
|-------|--|
| 4月11日 | 体育研究所全専任教員による研究所新施設検討会 |
| 7月24日 | 開放型運動施設業者選定ヒアリング（審査委員：所長、石手君、村山君） |
| 8月4日 | 体育研究所新施設設計監理業者選定コンペ（審査委員：所長、石手君、吉田君） |
| 8月23日 | 複合施設内に予定している開放型体育施設の業者をセントラルスポーツ㈱とすることを常任理事会で決定。なお、体育研究所新施設の設計監理業者は安藤建設㈱に決定。 |
| 9月26日 | 体育研究所・管財部・安藤建設打合せ（第1回） |

- コンペで提案された設計図について安藤建設から説明があった。
- 10月2日 (月) 日吉陸上競技場改修工事に伴う矢上グラウンド借用について打合せ(150年記念事業準備室長、学生総合センター矢上支部長、石手教育委員長、主事他)
- ・矢上グラウンド使用は、2007年度秋学期～2008年度春学期まで、ただし2008夏スクーリングは不可。
- 10月3日 体育研究所新施設設計に関する専任教員・学事センター職員による打合せ
- 10月12日 体育研究所・管財部・安藤建設打合せ(第2回)
- 新施設の基本設計案についての体育研究所内での検討結果を提示。
- 10月12日 体育研究所・管財部・(株)環境デザイン研究所・(株)三菱地所設計打合せ
- 複合施設内の体育施設について業者から説明を受け、意見交換を行った。
- 11月2日 体育研究所・管財部・安藤建設打合せ(第3回)
- 体育研究所からの各室要望事項に対して安藤建設から修正図面提示
- 11月7日 体育研究所新施設の修正案について総務委員会で基本的に合意を確認。
- 11月17日 体育研究所・管財部・環境デザイン研究所・三菱地所打合せ
- 複合施設内の体育施設案について、前回打合せを受けた修正図面の説明が業者からあった。
- 1月12日 体育研究所・管財部・安藤建設打合せ(第4回)

- 業者から修正図面が提示され、体育研究所はこれを了承した。
- 1月30日 スポーツ医学研究所大西副所長の召集により、複合施設内スポーツ施設等のあり方について体育研究所長・管財部他と意見交換を行った。
- 3月13日 体育研究所・管財部・安藤建設打合せ(第5回)

5 その他

- (1) 教員組織編制変更(2007年4月1日付)および事務体制整備のために、「体育研究所規程」の一部改正を行い、これに伴って研究所内の次の内規等の一部改正を行った(いずれも2007年4月1日施行)。
- 「人事内規」「人事委員会内規」「人事委員会委員選挙規則(細則)」「教員(有期)の職務規程」「助手(嘱託)の職務規程」「助手(嘱託)に関する内規」「助手に関する申し合わせ」
- (2) 慶應義塾と共立薬科大学が2008年4月の法人合併を前提に協議を開始したことが2006年秋に発表され、2007年3月26日には「合併契約書」が締結された。これに伴い、2008年度から合併後の薬学部1年生が日吉で教養教育を受けることが明確になった。共立薬科大学の体育科目担当教員も日吉に移籍してくることが予想され、研究所にとって新たな課題が付け加えられる形となった。

以上
(記録：主事 栗谷文治)

平成18年度活動報告書

平成19年 7 月 1 日発行

[非売品]

編 集：活動報告書編集委員会

吉田 泰将（委員長）

村山 光義 野口 和行 加藤 幸司

奥山 静代 西村 忍 牛山 潤一

発 行：慶應義塾大学体育研究所

〒223-8521 横浜市港北区日吉 4 - 1 - 1

制 作：(有)梅沢印刷所

〒108-8345 東京都港区三田 2 - 15 - 45